

南相馬市内遺跡発掘調査報告書14

—平成31年・令和元年度試掘・確認調査報告—

真野古墳群B地区(2次調査)

浦尻貝塚(15～17次調査)

高見町C遺跡(4次調査)

鶴谷坂下遺跡(1次調査)

東迫B遺跡(1次調査)

天梅B遺跡(1次調査)

権現沢遺跡(1次調査)

池ノ沢遺跡(3次調査)

中村平遺跡(4次調査)

原B遺跡(1次調査)

桜井B遺跡(15次調査)

熊平B遺跡(1次調査)

荒神前遺跡(9次調査)

栗成沢遺跡(1次調査)

東広畑A遺跡(1次調査)

中村平遺跡(5次調査)

御所内遺跡(2次調査)

中ノ内遺跡(1次調査)

池ノ沢B遺跡(2次調査)

大田和広畑遺跡(9次調査)

明神館跡(1次調査)

令和3年3月

南相馬市教育委員会

序 文

文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産です。地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展、そして地域のアイデンティティ形成の根幹をなすものです。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができない先人の生活の様子や、文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私たちに多くの情報を与えてくれます。

南相馬市内では、東日本大震災からの復旧・復興に伴う工事をはじめ、数多くの開発行為が行われており、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財を保護することが必要となっています。このような状況のなか、教育委員会では、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施いたしました。開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡の保存協議を行い、保存が困難な場合については、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

また、国史跡などの重要な価値を持つ遺跡の、適切な保存と幅広い活用を図るための調査を実施いたしました。平成31年・令和元年度は、浦尻貝塚および真野古墳群における範囲確認調査を行い、今後、史跡の保存や活用を進めるうえで、貴重な成果を得ることができました。

本書は、平成31年・令和元年度に文部科学省の補助金の交付を得て実施した南相馬市内遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめた報告書です。今後、これら埋蔵文化財の調査成果が文化財の保護や地域研究のために活用されることを祈念します。

結びに、調査の実施にご協力賜りました地権者の皆様、および関係機関の皆様、加えて震災復旧・復興にご支援、ご尽力頂きました皆様に、心から感謝申し上げます。

令和3年3月

南相馬市教育委員会

教育長 大和田 博之

例 言

1. 本書に記載した内容は、平成31年・令和元年度に南相馬市教育委員会が実施した南相馬市内の埋蔵文化財試掘調査、発掘調査の成果報告である。
2. 試掘調査・発掘調査等にかかる経費は、文部科学省補助金の交付を得ている。
3. 発掘調査ならびに報告書刊行は、以下の体制で実施した。
 - ・調査期間 平成31年4月2日～令和2年3月31日
 - ・整理期間 令和2年4月1日～令和3年3月31日
 - ・調査主体 南相馬市教育委員会

事 務 局 南相馬市教育委員会文化財課

平成31年度(令和元年度)

教 育 長	大和田 博行	主任文化財主事	佐 川 久
事 務 局 長	羽山 時夫	主任主査	田 中 稔 (震災記録誌担当)
文化財課長	堀 耕 平	主任文化財主事	佐藤 友之
課長補佐兼文化財係長	齋藤 直之	埋蔵文化財調査員	濱 須 脩 (嘱託)
埋蔵文化財担当係長	川 田 強	埋蔵文化財調査員	小 椋 紗 貴 江 (嘱託)
主任文化財主事	荒 淑 人	市史編纂編集員	茂 木 千 恵 美 (嘱託)
主任文化財主事	藤 木 海	市史編纂編集員	岡 加 奈 子 (嘱託)

令和2年度

教 育 長	大和田 博行	主任文化財主事	佐 川 久
事 務 局 長	羽山 時夫	主任主査	田 中 稔 (震災記録誌担当)
文化財課長	鈴木 悦子	埋蔵文化財調査員	濱 須 脩 (会計年度任用職員)
課長補佐兼文化財係長	齋藤 直之	市史編纂編集員	茂 木 千 恵 美 (会計年度任用職員)
課長補佐兼埋蔵文化財担当係長	川 田 強	市史編纂編集員	中 河 仁 子 (会計年度任用職員)
主任文化財主事	藤 木 海		

整理補助員 泉田あずさ・岩崎美和子・寺島千尋・渡部定子・山本樹里・土屋和美

4. 本書に掲載した自然科学分析は下記の機関に依頼して実施した。
株式会社バレオ・ラボ 藤根 久・鈴木正章
5. 発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げる。
鈴木冬樹・株式会社相双重機土木・佐藤建設株式会社・磯打正行・株式会社ふくしまエナジー

・株式会社国新・田代好・有限会社サンホーム・京谷凌・片岡圭太・井戸川徳義・株式会社トレードジャパン・株式会社伏見材木店・原和義・原七重・志賀功・志賀英信

(順不同 敬称略)

6. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の方々から指導・助言を得た。記して感謝申し上げる。
文化庁文化財部記念物課・福島県教育委員会・公益法人福島県文化振興財団・津田直子・齋田克史・岡部睦美・山本友紀・渡部紀・大栗行紀・香川愼一・安藤淳・佐藤啓・加藤学・千葉正彦・門脇秀典
(順不同 敬称略)
7. 本報告書に掲載した文章ならびに挿図・写真図版は調査担当者が執筆・作成し、最終的な編集は各担当者と協議して演習が行った。
8. 調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 図中の方位は真北方向を示し、水系レベルは海拔高度を示す。
2. 本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。
T: トレンチ、SI: 竪穴住居跡、SD: 溝跡、SK: 土坑、P: ピット、L: 基本層位、ℓ: 遺構内層位

目 次

序 文	i
例 言	iii
凡 例	iv
目 次	v
挿図目次	vi
写真目次	vii
表目次	ix

第 I 章 南相馬市を取り巻く環境

第 1 節 地理的環境	1
第 2 節 歴史的環境	1

第 II 章 平成 31 年・令和元年度試掘・確認調査の概要

第 III 章 調査成果

第 1 節 保存目的の調査成果

第 1 項 真野古墳群 B 地区（2 次調査）	7
第 2 項 浦尻貝塚（15～17 次調査）	12

第 2 節 試掘調査成果

第 1 項 高見町 C 遺跡（4 次調査）	24
第 2 項 鶴谷坂下遺跡（1 次調査）	25
第 3 項 東迫 B 遺跡（1 次調査）	29
第 4 項 天梅 B 遺跡（1 次調査）	31
第 5 項 権現沢遺跡（1 次調査）	35
第 6 項 池ノ沢遺跡（3 次調査）	36
第 7 項 中村平遺跡（4 次調査）	40
第 8 項 原 B 遺跡（1 次調査）	41
第 9 項 桜井 B 遺跡（15 次調査）	42
第 10 項 熊平 B 遺跡（1 次調査）	43
第 11 項 荒神前遺跡（9 次調査）	44
第 12 項 栗成沢遺跡（1 次調査）	46
第 13 項 東広畑 A 遺跡（1 次調査）	53

第14項	中村平遺跡（5次調査）	55
第15項	御所内遺跡（2次調査）	56
第16項	中ノ内遺跡（1次調査）	57
第17項	池ノ沢B遺跡（2次調査）	59
第18項	大田和広畑遺跡（9次調査）	61
第19項	明神館跡（1次調査）	62

第IV章 真野20号墳のテフラ分析 65

報告書抄録

奥付

挿 図 目 次

図1	南相馬市位置	1	図28	熊平B遺跡位置図	43
図2	主要遺跡位置	4	図29	調査区位置図	43
図3	調査遺跡位置図	6	図30	荒神前遺跡位置図	44
図4	真野古墳群B地区墳丘分布図	7	図31	調査区位置図	44
図5	調査区平面図・遺構断面	9	図32	1T平面図	44
図6	浦尻貝塚調査区位置図	12	図33	栗成沢遺跡位置図	46
図7	15・16次調査区位置図	14	図34	調査区配置図	47
図8	高見町C遺跡位置図	24	図35	遺構平面図・断面図	48
図9	調査区位置図	24	図36	栗成沢遺跡1次調査出土遺物	49
図10	鶴谷坂下遺跡位置図	25	図37	東広畑A遺跡位置図	53
図11	開発範囲・調査区位置図	25	図38	調査区位置図	53
図12	1T製鉄炉跡検出状況	26	図39	調査区遺構平面図	53
図13	東迫B遺跡位置図	29	図40	中村平遺跡位置図	55
図14	調査区位置図	29	図41	調査区位置図	55
図15	天梅B遺跡位置図	31	図42	御所内遺跡位置図	56
図16	調査区位置図	31	図43	調査区位置図	56
図17	調査区遺構配置図	32	図44	中ノ内遺跡位置図	57
図18	権現沢遺跡位置図	35	図45	調査区位置図	57
図19	調査区位置図	35	図46	調査区平面図	58
図20	池ノ沢遺跡位置図	36	図47	池ノ沢B遺跡位置図	59
図21	調査区配置図	37	図48	調査区配置図	60
図22	中村平遺跡位置図	40	図49	大田和広畑遺跡位置図	61
図23	調査区位置図	40	図50	調査区配置図	61
図24	原B遺跡位置図	41	図51	明神館跡位置図	62
図25	調査区位置図	41	図52	調査区配置図	63
図26	板井B遺跡位置図	42	図53	遺構配置	63
図27	調査区位置図	42	図54	火山ガラスの屈折率測定結果	66

写真目次

真野古墳群B地区2次調査

写真1	調査着手前	10
写真2	下草除去後	10
写真3	作業風景	10
写真4	1 T 全景	10
写真5	北側周溝外周部調査状況	10
写真6	2 T 全景	11
写真7	3 T 全景	11
写真8	3 T 調査状況	11
写真9	SD1・SD2	11
写真10	SD1土層断面	11
写真11	F P 火山灰堆積状況	11

浦尻貝塚15～17次調査

写真12	下草刈り作業状況	16
写真13	下草刈り作業後状況	16
写真14	ブルーシート撤去状況	16
写真15	土糞撤去状況	16
写真16	貝層検出作業状況	16
写真17	貝層検出作業状況2	16
写真18	貝層検出作業状況3	16
写真19	貝層検出作業状況4	16
写真20	15次調査区全景	17
写真21	15次調査区全景	17
写真22	1 T 調査区全景	18
写真23	1 T 調査状況1	18
写真24	1 T 調査状況2	18
写真25	1 T 遺物出土状況1	18
写真26	1 T 遺物出土状況2	18
写真27	2 T 調査区全景	19
写真28	2 T 調査状況1	19
写真29	2 T 調査状況2	19
写真30	2 T 遺物出土状況	19
写真31	2 T 遺物出土状況2	19
写真32	3 T 調査区全景	20
写真33	3 T 調査状況1	20
写真34	3 T 調査状況2	20
写真35	3 T 遺物出土状況	20
写真36	3 T 遺物出土状況2	20
写真37	浦尻貝塚15次調査出土遺物1	20
写真38	浦尻貝塚15次調査出土遺物2	22
写真39	浦尻貝塚15次調査出土遺物3	23

高見町C遺跡4次調査

写真40	1 T 全景	24
写真41	1 T 土層断面	24

鶴谷坂下遺跡1次調査

写真42	防空壕確認状況	27
写真43	防空壕調査状況	27
写真44	1号防空壕	27
写真45	1号防空壕	27
写真46	1号防空壕	27
写真47	2号防空壕	27
写真48	2号防空壕	27
写真49	2号防空壕	27
写真50	1 T 全景	28
写真51	製鉄炉跡全景	28
写真52	製鉄炉跡全景	28
写真53	炉体全景	28
写真54	炉体全景	28

東迫B遺跡1次調査

写真55	製鉄炉推定範囲	30
写真56	鉄滓分布状況	30
写真57	20 T 全景	30
写真58	23 T 全景	30
写真59	25 T 全景	30

天梅B遺跡1次調査

写真60	調査前状況全景	33
写真61	2 T 調査状況	33
写真62	2 T S 1 3 検出状況	33
写真63	4 T 調査状況	33
写真64	4 T S 1 1 検出状況	33
写真65	5 T 調査状況	33
写真66	5 T S 1 2 検出状況	33
写真67	5 T S K 1・P 1 検出状況	33
写真68	5 T S K 2 検出状況	34
写真69	13 T 調査状況	34
写真70	13 T S 1 4 検出状況	34
写真71	13 T S K 8 検出状況	34
写真72	17 T 調査状況	34
写真73	17 T 木炭窯跡検出状況	34
写真74	19 T 調査状況	34
写真75	19 T 木炭窯跡検出状況	34

権現沢遺跡1次調査

写真76	1 T 調査状況	35
写真77	4 T 調査状況	35

池ノ沢遺跡3次調査	写真114 16 T S I 2 刃跡検出状況	50
写真78 8 T 1号木炭室(室1) 検出状況	写真115 16 T S I 2 土層堆積状況	50
写真79 11 T 1号製鉄炉(炉1) 検出状況	写真116 6 T 全景	51
写真80 2号木炭室(室2) 検出状況	写真117 6 T S K 1 検出状況	51
写真81 30 T 1号廃滓場(廃1) 検出状況	写真118 7 T 全景	51
写真82 2号廃滓場(廃2) 検出状況	写真119 7 T S K 2 検出状況	51
写真83 2号廃滓場(廃2) 鉄滓散布状況	写真120 23 T 全景	51
写真84 44 T 3号木炭室(室3) 検出状況	写真121 23 T S K 3 検出状況	51
写真85 45 T 2号製鉄炉(炉2) 検出状況	写真122 10 T 全景	51
写真86 3号廃滓場(廃3) 検出状況	写真123 10 T S K 4 検出状況	51
写真87 3号廃滓場(廃3) 鉄滓散布状況	写真124 栗成沢遺跡1次調査出土遺物	52
写真88 4号廃滓場(廃4) 検出状況		
写真89 4号廃滓場(廃4) 鉄滓散布状況	東広畑A遺跡3次調査	
写真90 7 T 全景	写真125 調査区全景	54
写真91 15 T 全景	写真126 1 T 調査状況	54
写真92 41 T 全景	写真127 1 T S I 1・2 検出状況	54
写真93 58 T 全景	写真128 2 T 調査状況	54
	写真129 2 T S I 3・4・5 検出状況	54
中村平遺跡4次調査	写真130 3 T 調査状況	54
写真94 調査前状況	写真131 2 T S I 6・7・8 検出状況	54
写真95 1 T 調査状況	写真132 4 T 調査状況	54
原B遺跡1次調査	中村平遺跡5次調査	
写真96 1 T 調査状況	写真133 調査前状況	55
写真97 2 T 調査状況	写真134 1 T 調査状況	55
桜井B遺跡15次調査	御所内遺跡2次調査	
写真98 調査前状況	写真135 1 T 全景	56
写真99 1 T 調査状況	写真136 1 T 掘削状況	56
熊平B遺跡1次調査	中ノ内遺跡1次調査	
写真100 1 T 調査状況	写真137 1 T 調査状況	58
写真101 3 T 調査状況	写真138 1 T ビット 検出状況	58
	写真139 2 T 調査状況	58
	写真140 2 T ビット 検出状況	58
荒神前遺跡9次調査		
写真102 調査前状況全景	池ノ沢B遺跡2次調査	
写真103 作業状況	写真141 5 T 全景	60
写真104 1 T 調査状況	写真142 7 T 全景	60
写真105 1 T S I 1 検出状況	写真143 14 T 全景	60
写真106 1 T S I 1 検出状況	写真144 21 T 全景	60
写真107 1 T S I 1 検出状況		
	大田和広畑遺跡9次調査	
栗成沢遺跡1次調査	写真145 1 T 調査状況	61
写真108 13 T 全景	写真146 3 T 調査状況	61
写真109 13 T S I 1 調査状況①		
写真110 13 T S I 1 調査状況②	明神館跡1次調査	
写真111 13 T S I 1 土層堆積状況	写真147 1 T 全景①	64
写真112 16 T 全景	写真148 1 T 全景②	64
写真113 16 T S I 2 調査状況	写真149 1 T ビット 検出状況①	64

写真 150	1 T ビット検出状況②	64
写真 151	2 T 全景	64
写真 152	2 T P 1 ・ S D 1 調査状況	64
写真 153	3 T 全景	64

写真 154	3 T S K 1 検出状況	64
--------	----------------	----

真野 20 号墳のテフラ分析

写真 155	テフラ試料中の粒子の顕微鏡写真	67
--------	-----------------	----

表 目 次

表 1	南相馬市主要遺跡一覧表	3
表 2	テフラ試料の詳細	65

表 3	テフラ試料の温式篩分け・重液分離の結果	65
表 4	4 φ 篩残渣中の鉱物組成	66

第1章 南相馬市を取り巻く環境

第1節 地理的環境

福島県南相馬市は、福島県太平洋岸の中央部やや北寄りに位置する。行政境は、北側は相馬市、南側は双葉郡浪江町、西側は相馬郡飯館村と接する。

浜通り地方の地質は、阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯、双葉断層(岩沼-久之浜構造線)により明瞭に区分される。

市内の地形を見ると、西部域に南北方向に連なる阿武隈高地が縦走り、そこから太平洋に向かって派生する低丘陵と丘陵間に開析された沖積平野で構成される。阿武隈高地にかかる西側の丘陵の標高は100～150mを測り、海岸部に近い市内中心付近では標高50～60m前後、海岸部では20～30mとなる。



図1 南相馬市位置図

第2節 歴史的環境

南相馬市内に所在する旧石器時代の遺跡としては、大谷地遺跡(1)・畦原A遺跡(2)・畦原C遺跡(3)・熊下遺跡(4)・袖原A遺跡(5)・陣ヶ崎A遺跡(6)・南町遺跡(7)・橋本町A遺跡(8)・橋本町B遺跡(9)・桜井遺跡(10)・荻原遺跡(11)の11遺跡があり、後期旧石器時代のナイフ形石器や彫刻刀型石器を出土している。

縄文時代の遺跡では、宮後A遺跡(12)・宮後B遺跡(13)から大木7a～10式、八幡林遺跡(14)では早期から晩期までの土器が出土する。八重米坂A遺跡(15)・羽山B遺跡(16)・畦原F遺跡(17)では早期から前期の遺構・遺物が確認されており、赤沼遺跡(18)・犬這遺跡(19)でも前期の土器が出土している。中期では阿武隈高地裾部にある前田遺跡(20)や、新田川北岸の台地上にある高松遺跡(21)で大木7b～10式、植松A遺跡(22)で大木10式期の住居跡が調査されている。

太田川流域の上ノ内遺跡(23)・町川原遺跡(24)では後期の綱取式が出土し、片倉の羽山遺跡(25)では晩期の大洞C1～A式、高見町A遺跡(26)では晩期中葉の土器と石囲炉をもつ住居跡が調査されている。宮田貝塚(27)・加賀後貝塚(28)・片草貝塚(29)は内陸部に位置する貝塚を伴う前期前半の集落である。前期後半以降には海岸部にある浦尻貝塚(30)や角部内南台貝塚(31)が代表的な貝塚として知られている。

弥生時代としては天神沢遺跡(32)や桜井遺跡(33)が著名であるが、近年では桜井古墳(34)や川内迫B遺跡群F地点(35)で中期中葉の榊形皿式土器が出土し、高見町A遺跡からは終末期の十王台式土器が出土している。

古墳時代では、古墳時代前期に新田川南岸の河岸段丘上に桜井古墳が築造され、周辺の古墳と共に桜井古墳群上渋谷支群(36)・同高見町支群(37)を構成する。真野川流域の柚原古墳群(38)では周溝内から塩釜式土器が出土し、高見町A遺跡・桜井B遺跡(39)・東広畑B遺跡(40)でも塩釜式土器が出土している。前方後円墳である上ノ内前田古墳(41)は中期の可能性があり、真野古墳群(42)・横手古墳群(43)は円筒埴輪を伴うことから、その造営開始は中期未まで遡る可能性がある。この時期の集落は前屋敷遺跡(44)で南小泉式土器を出土する竪穴住居跡が調査されている。後期になると桜井古墳群高見町支群・真野古墳群・横手古墳群などで本格的に古墳群の造営が開始される。真野古墳群は100基を超える東北地方を代表する後期群集墳である。

後期の集落としては大六天遺跡(45)・迎畑遺跡(46)・地藏堂B遺跡(47)・片草古墳群一里段支群(48)・中村平遺跡(49)で後期から終末期の土器が出土する。終末期の横穴墓のうち大窪横穴墓群(50)・羽山横穴墓群(51)・浪岩横穴墓群(52)は玄室内部に裝飾壁画が見られ、真野川流域の中谷地横穴墓群は(53)複室構造の玄室を採用している。

奈良・平安時代の遺跡では行方郡家とされる泉官衙遺跡(泉慶寺跡)(54)があり、郡庁院・正倉院・館院などが確認されている。横手慶寺跡(55)・真野古城跡(56)・植松慶寺跡(57)・入道迫瓦窯跡(58)・京塚沢瓦窯跡(59)・犬這瓦窯跡(60)などは瓦を出土する遺跡であり、寺院や瓦を焼成した遺跡と考えられる。市内の低丘陵では製鉄に関連した遺跡が多数確認されており、金沢製鉄遺跡群(61)・蛭江遺跡(62)・川内迫B遺跡群(63)・出口遺跡(64)・大塚遺跡(65)・横大道遺跡(66)・館越遺跡(67)などで調査が進展している。集落遺跡では広畑遺跡(68)を始めとして市内各地で確認されているが、集落の具体的な構造を知るまでには至っていない。広畑遺跡からは「寺」「厨」などの墨書土器とともに灰釉陶器が出土し、隣接する泉官衙遺跡との関連が示唆される。大六天遺跡から出土した「小殿殿千之」と刻書された須恵器は、行方軍団との関わりが、町川原遺跡でも墨書土器が出土しているが、広畑遺跡のような公的機関の施設名を記したものは見られず、異なった性格をもつ集落と考えられる。

主な中世の遺跡としては城館跡が挙げられ、下総国から南向した相馬氏の最初の居城となる別所館跡(69)現太田神社)や牛越城跡(70)は、相馬氏南向以前の城館跡として良く知られている。小高城跡(71 現小高神社)は相馬氏の居城として機能した中世城館である。本城跡は嘉暦元年から慶長十六年に相馬利胤が中村城を築城するまでの約290年間重要な役割を占めた。その他では泉平館跡(72)・泉館跡(73)・下北高平館跡(74)で調査が行われている。

近世の遺構は、寛文六年以降に築かれた野馬土手と、その出入口となる木戸跡や相馬氏の居城として再整備された牛越城跡がある。野馬土手は、雲雀ヶ原扇状地を囲む、東西約10km×南北約2.6kmの範囲に築かれており、土手内外の出入り口となった羽山岳の木戸跡(75)は南相馬市指定史跡に指定され、良好な形で保存されている。近世後半から近代にかけては中村藩の大規模なたたらである馬場鉄山(76)や正福寺跡(77)、法幢寺跡(78)で近世墓域の調査が行われている。

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	大谷地遺跡	散布地	旧石器・縄文	41	上ノ内古墳	古墳	古墳
2	畦原A遺跡	散布地	旧石器	42	真野古墳群	古墳	古墳
3	畦原C遺跡	散布地	旧石器	43	横平古墳群	古墳	古墳
4	熊下遺跡	散布地	旧石器	44	前原敷遺跡	集落・散布地	縄文～古墳
5	袖原A遺跡	散布地	旧石器	45	大六天遺跡	集落・散布地	古墳～平安
6	陣ヶ崎A遺跡	散布地	旧石器	46	迎畑遺跡	集落・散布地	古墳
7	南町遺跡	散布地	旧石器	47	地藏堂B遺跡	集落・散布地	古墳
8	橋本町A遺跡	散布地	旧石器	48	片草古墳群 一里段支群	古墳・集落	古墳～平安
9	橋本町B遺跡	散布地	旧石器	49	中村平遺跡	集落・散布地	古墳
10	桜井遺跡	散布地・集落	旧石器・縄文・弥生 古墳・奈良・平安	50	大塚横穴墓群	横穴墓	古墳
11	萩原遺跡	散布地・製鉄跡	旧石器・奈良・平安	51	羽山横穴墓群	横穴墓	古墳
12	宮後A遺跡	集落・散布地	縄文	52	浪岩横穴墓群	横穴墓	古墳
13	宮後B遺跡	集落・散布地	縄文	53	中谷地横穴墓群	横穴墓	古墳
14	八幡林遺跡	散布地	旧石器・縄文	54	泉官衝遺跡	官衝	奈良・平安
15	八重木家A遺跡	集落・散布地	縄文	55	横手庵寺跡	寺院	平安
16	羽山B遺跡	集落・散布地	縄文	56	真野古城跡	城館	不明
17	畦原F遺跡	住居・散布地	縄文	57	植松庵寺跡	寺院	奈良・平安
18	赤沼遺跡	集落・散布地	縄文	58	入道垣瓦窯跡	窯跡	奈良・平安
19	大道遺跡	散布地	縄文	59	京塚沢瓦窯跡	窯跡・製鉄	奈良・平安
20	前田遺跡	散布地	縄文	60	大道瓦窯跡	窯跡	奈良・平安
21	高松遺跡	散布地	縄文	61	金沢製鉄遺跡群	製鉄・散布地	弥生・奈良・平安
22	權松A遺跡	集落・散布地	縄文	62	蛭沢遺跡	製鉄	奈良・平安
23	上ノ内遺跡	散布地	縄文	63	川内始B遺跡群	製鉄・散布地	弥生・奈良・平安
24	町川原遺跡	集落・散布地	縄文	64	出口遺跡	製鉄	平安
25	羽山遺跡	集落・散布地	縄文	65	大塚遺跡	製鉄	平安
26	高見町A遺跡	集落・散布地	縄文～平安	66	横大道遺跡	製鉄・集落跡	奈良・平安
27	宮田貝塚	貝塚・散布地	縄文	67	館越遺跡	製鉄	平安
28	加賀後貝塚	貝塚・散布地	縄文	68	広畑遺跡	集落・散布地	奈良・平安
29	片草貝塚	貝塚・散布地	縄文	69	別所館跡	城館	中世
30	浦尻貝塚	貝塚・散布地	縄文・平安	70	牛越城跡	城館	中世
31	角部内南台貝塚	貝塚・散布地	縄文	71	小高城跡	城館	中世
32	天神沢遺跡	散布地	弥生	72	泉平館跡	城館・散布地	中世
33	桜井遺跡	散布地・集落	旧石器・縄文・弥生・ 古墳・奈良・平安	73	泉館跡	城館	中世
34	桜井古墳	古墳	古墳	74	下北高平館跡	城館	中世
35	川内始B遺跡群	製鉄・散布地	弥生・奈良・平安	75	羽山岳の木戸跡	その他	近世
36	桜井古墳群 上段佐支群	古墳・散布地	縄文～平安	76	馬場鉄山	製鉄	近世
37	桜井古墳群 高見町支群	古墳・集落	縄文～古墳	77	正福寺跡	寺院	近世
38	袖原古墳群	古墳	古墳	78	法権寺跡	寺院・集落	奈良・平安・ 近世
39	桜井B遺跡	集落・散布地	弥生・平安				
40	東広畑B遺跡	集落・散布地	弥生～平安				

表1 南相馬市主要遺跡一覧表

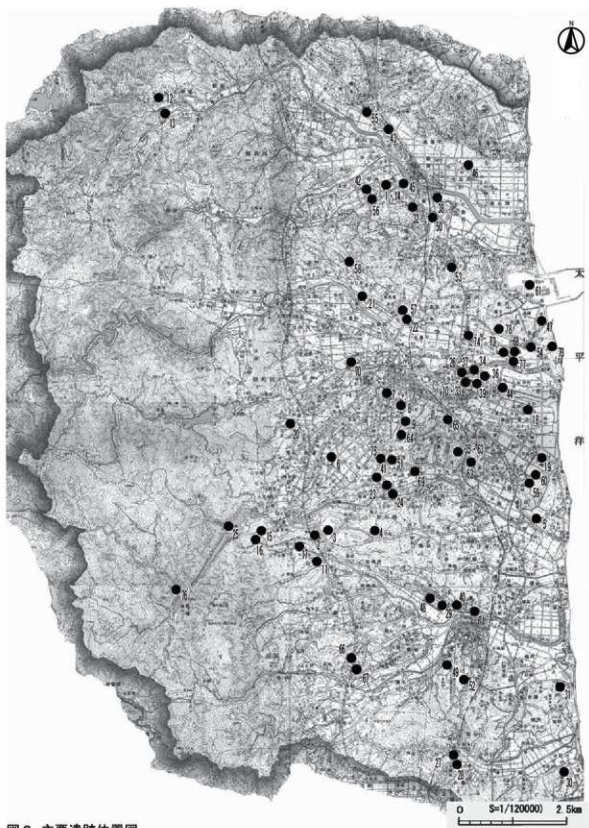


図2 主要遺跡位置図

第Ⅱ章 平成31年・令和元年度試掘・確認調査の概要

平成31年・令和元年度に市内遺跡発掘調査で実施した調査は、保存を目的とした史跡の範囲内容確認及び市内における各種開発計画に対する保存協議の資料を得るために行った。

保存目的の調査は、浦尻貝塚の史跡整備に伴う範囲確認調査及び台風被害に伴う現状復旧を目的とした調査と真野古墳群B地区の国史跡指定地の追加指定に伴う範囲確認調査の2件である。

浦尻貝塚の調査は、本遺跡北部の台ノ前北地区で貝塚の範囲確認調査、南部の小迫北地区で現状復旧に伴う調査が行われた。台ノ前北地区では、東向き斜面の段丘縁辺から斜面にかけての441㎡の範囲で調査が実施された。現状復旧に伴う調査では、東向き斜面の段丘縁辺付近の法面部分の11㎡の範囲において実施された。真野古墳群B地区の範囲確認調査は、1,208㎡を対象とした墳形及び墳丘周辺の関連遺構を把握することを目的として調査が実施された。

平成31年・令和元年度の最終的な実績では、周知の埋蔵文化財包蔵地内において20遺跡23地点にて行った。試掘調査を開発目的別に見ると、個人住宅建設関連が5件、個人農地造成関連が1件、土砂採取計画関連が5件、太陽光発電施設建設関連が5件、車庫・倉庫の建設関連が1件、法面整形関連が1件、その他の民間事業関連が1件を数える。

個人住宅建設関連は、高見町C遺跡、中村平遺跡(2地点)、桜井B遺跡、御所内遺跡である。農地造成関連は東成沢遺跡である。太陽光発電施設建設関連は、権現沢遺跡、熊平B遺跡、東広畑A遺跡、中ノ内遺跡、大田和広畑遺跡である。土砂採取計画関連は、鶴谷坂下遺跡、東迫B遺跡、池ノ沢遺跡、池ノ沢B遺跡、大田和広畑遺跡である。車庫・倉庫の建設関連は、荒神前遺跡である。法面整形関連は、明神館跡である。工場建設関連は原B遺跡である。

以上の調査については、事前に開発予定地における試掘調査の依頼を受けて調査を実施した。

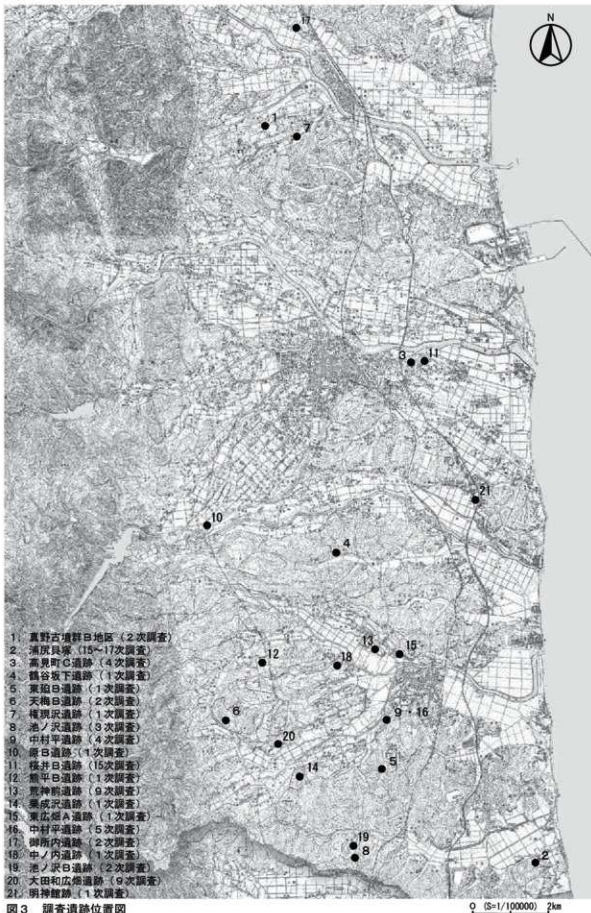


図3 調査遺跡位置図

第三章 調査成果

第1節 保存目的の調査成果

第1項 真野古墳群B地区(2次調査)

- 1 調査原因 範囲内容確認調査
- 2 調査地点 南相馬市鹿島区小池字長沼地内
- 3 調査期間 令和元年9月18日～令和元年10月17日
- 4 調査対象面積 1,208㎡
- 5 調査面積 1,208㎡
- 6 調査担当 主査 荒 淑人
- 7 調査に至る経過

今回実施した真野古墳群B地区の範囲内容確認調査は、国史跡真野古墳群の国史跡指定地の追加指定を目的に実施した。国史跡真野古墳群は、真野古墳群A地区とB地区を合わせて47基の古墳が国史跡指定を受けているが、指定範囲は墳丘部分のみ指定となっており、古墳を構成する周溝等の施設は未指定であることから、古墳の保護措置として適切な指定になっていない現状が続いていた。



南相馬市教育委員会では、このような状況を改善し、国史跡として十分な保護措置を講じるために、真野古墳群調査保存検討委員会を発足し、国史跡真野古墳群の保護措置を検討することとした。このような状況から、真野古墳群B地区の指定状況を確認するために、本年度は20号周辺に調査区を設けて、周溝等の墳丘に関連した遺構の有無の確認を目的に調査を実施した。

8 調査成果

本年度に実施した真野古墳群B地区20号墳の範囲内容確認調査に際しては、発掘調査の事前に墳丘の測量図作成を行った。墳丘測量図は幅25cmの等高線を用いて墳丘の現状を表し、また傾斜が変換する線は破線を用いて表現した。

墳丘測量図を作成した時点で把握された墳丘の遺存状況を示すと、墳丘の東部は、隣接する農道の開削に伴って、墳丘が削平されたものと見られ、傾斜変換線は境に直線的に等高線が走っている様子が観察される。また、墳丘北部に対して墳丘南東部は等高線の間隔が広がっていることから、この部分については墳丘積土が流出している可能性が高い。現状で把握される墳丘規模は、南北13.6m、東西12.8m、高さ1.5mである。

調査では、トレンチの設定が可能な墳丘北側、南側、西側、南西部の4箇所に調査区を設定して周溝の範囲確認に努めた。結果的には2・4Tでは河岸段丘基盤層となる砂礫層に達し、周溝は確認できなかった。3Tでは砂礫層の上位に堆積する黄色ロームが確認され、SD1とSD2の2条の小規模な溝跡と3基の土坑状の掘り込みを確認したが、出土遺物がなく年代等は不明である。ただしSD1の堆積土には火山灰の堆積が見られ、分析の結果、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)であることが判明したことから、6世紀後半段階には、現状の地形であったことが確認された。

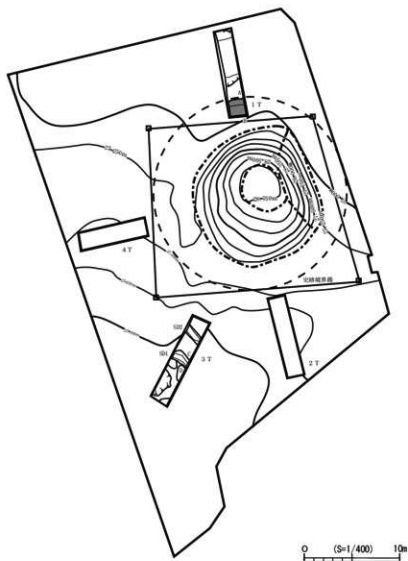
墳丘北側に設けた1Tでは、近現代の製鉄関連の大きな掘り込みと、20号墳の北側周溝の外周の一部が確認できた。周溝の大部分は史跡指定地内におさまっているものと見られる。周溝の堆積土を観察した限り、黒色シルトで埋没している状況が確認されたが、3Tで見られたような火山灰の堆積は確認できなかった。周溝の上端から下端までの深さは約50cmを計測する。

9 調査所見

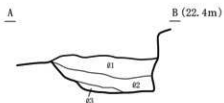
今回の範囲内容確認調査では、20号墳の周囲に調査区を設定して関連する周溝の確認作業を行ったが、墳丘西側と南側に設けた調査区では、周溝の存在は確認できなかったことから、20号墳の周溝は史跡指定地内におさまっているものと考えられる。

一方、墳丘北側に設けた1Tでは周溝の外周が把握されたことから、この部分については史跡指定地外に周溝が存在していることが明らかとなった。周溝堆積土には、周囲に分布するHr-FPの堆積が見られないことから、Hr-FPが降下する時点では周溝は埋没していたか、20号墳はHr-FPが降下以降に造営された可能性がある。

今回の調査では20号墳の周溝の一部は史跡指定地外に広がっていることが、改めて確認されたことから、この部分については追加指定等の措置による遺構の保存措置が必要である。



1 T20号墳周溝



- 01: 淡黒褐色土: 粘性 弱 しまり 中
褐色土ブロックを所々含む
- 02: 暗灰褐色土: 粘性 中 しまり 中
全体に黄色土粒を均一に含む
- 03: 灰褐色土: 粘性 中 しまり 中
全体に黄褐色土ブロックを均一に含む

3 T SD 1



- 01: 黒色土: 粘性 弱 しまり 弱
榛名ニツ岳伊香保テフラ含む
- 02: 暗黄褐色土: 粘性 強 しまり 中
黄色土粒を均一に含む
- 03: 暗褐色土: 粘性 中 しまり 中
黄褐色土ブロックを所々含む

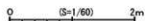


図5 調査区平面図・遺構断面図



写真1 調査着手前



写真2 下草除去後



写真3 作業風景



写真4 1T全景



写真5 北側周溝外周部調査状況



写真6 2T全景



写真7 3T全景



写真8 3T調査状況



写真9 SD1・SD2



写真10 SD1土層断面



写真11 火山灰(Hr-FP)堆積状況

第2項 浦尻貝塚(15～17次調査)

- 1 調査地点 南相馬市小高区浦尻字台ノ前地内
- 2 調査期間 15次調査 令和元年9月11日～令和元年12月25日
16次調査 令和2年3月4日～令和2年3月27日
17次調査 令和2年3月19日～令和3月23日
- 3 調査対象面積 452 m²
- 4 調査面積 15次調査 231m²
16次調査 210m²
17次調査 11m²
- 5 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
- 6 遺跡概要

浦尻貝塚は南相馬市小高区浦尻字南台ほか地内に位置し、縄文時代前期後葉から晩期中葉にかけての貝塚を伴う集落である。長期間の利用が認められ、周辺地域で唯一貝塚の継続的な形成がみられる中核的な集落である。

平成12年度に旧小高町道の建設計画に伴い、小高町教育委員会による試掘調査が実施された。この調査により貝層をはじめ、遺構が良好な保存状況で確認され、建設計画が見直された。この後実施された保存目的の発掘調査によって当地域の縄文文化を解明する上で極めて重要であると評価

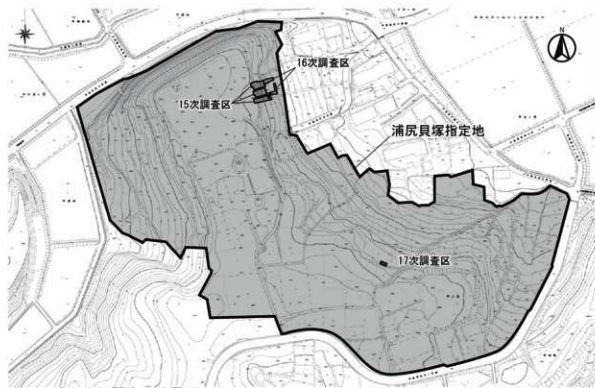


図6 浦尻貝塚調査区位置図

され、平成18年(2006)1月に国指定史跡に指定された。平成22年(2010)の追加指定とあわせ、現在の指定面積は71,510.74㎡である。

7 調査に至る経緯

15次調査を行った箇所は、平成22年度(2010)に11次調査として調査が行われていた箇所である。調査完了後は土嚢やブルーシート等で保護を行い、翌年に改めて詳細な検討及び貝層の剥ぎ取りが予定されていた。しかし、平成23年(2011)3月11日に発生した東日本大震災により浦尻貝塚史跡整備事業は一時中止となったことで、平成22年度調査区は、調査状況のまま放置されることとなった。その後、東日本大震災後の社会状況を踏まえたうえで平成29・30年度に計画が見直しされ、平成31年4月に改めて浦尻貝塚史跡整備事業基本計画が策定された。計画の策定と共に、平成22年度調査区の再検討を目的として、浦尻貝塚15次調査が行われる運びとなった。

その後、15次調査で得られた情報をもとに整備計画を検討した結果、施設の基礎設置箇所の位置関係から調査区の一部を拡張し、堆積状況・範囲等の確認が必要となった。貝層展示施設の整備において、貝層の保護は最優先であるため、基礎を設置して問題ない箇所を明確にする必要がある。そのため、15次調査区東側の展示施設建設位置で遺構の有無を確認するため16次調査が行われた。

17次調査は令和元年(2019)10月に発生した台風の影響により、浦尻貝塚南部の東向き斜面に所在する小迫北地区の斜面の一部が崩落している状況が確認されたため、現状復旧に伴う調査として、17次調査が行われた。

8 調査方法

【15次調査】

15次調査では、平成22年度に11次調査が行われた台ノ前北貝層に設定された1～3 Tの調査区を対象とし、調査区内の状況を精査、再検討を目的とした。

調査では、ブルーシート及び土嚢袋の撤去作業から精査及び遺構検出作業までの作業をすべて人力で行った。確認された遺構については、貝塚の保護の点から上面での検出に留め、遺構の輪郭ならびに重複関係の確認が必要な場合には、上面から深さ5 cm以内に限定したうえで掘削を行った。精査後(検出後)は平成22年度に作成した平面図をもとに層位を再分層し、土層の記録を行った。出土した遺物については、検出状況から元位置での保存が困難な遺物のみを調査区・遺構・層位・日付を記録のうえ取り上げた。

平面図についてはドローンを用いた三次元写真計測を使用して全体の平面図を作成した。記録写真は、15次～17次ともにデジタルカメラによる調査区全体及び部分的な撮影を行った。

【16次調査】

16次調査では、貝塚展示施設の設置個所の計画変更に伴い、15次調査区の東側に貝塚の広がりを確認するため、1・2 Tの調査区の一部を拡張した。

調査では、重機により11次調査及び15次調査の際に出た廃土山の移動後、1 T・2 Tの一部を拡張した。

平面・断面図については遺構実測支援ソフト(株式会社CUBIC)を使用し作成した。

【17次調査】

17次調査は、浦尻貝塚小迫北地区の崩落した斜面の現状復旧に伴う調査を行った。調査は、人力で崩落した土砂を掘削するにあわせ土砂内の遺物を回収した。その後精査を行い、記録を行った。

9 調査成果

【15次調査】

調査は、貝層表面の再精査を行い、平成13年度の平面・断面の記録を基に平面観察を行った。層位の大別は平成13年度に分類された土主体層及び混貝土層の2層とし、細別は平成22年度の平面観察の記録を基に堆積土の色調及び含有物の量を比較して行った。なお、今回はサブトレンチの掘削は行わずに平面的な観察に留め、貝層の保護を優先した。

調査の結果、全体の観察から土器の出土量や混貝率等の違いはあるが、2次調査で確認されものと同様に土主体層と混貝土層が交互に堆積する状況が確認された。また、一部の層から、谷状の地形を埋めるにして土や貝類の廃棄を行っていたことが堆積状況を検討した結果判明している。

出土した遺物は、大木6～9式が出土している。平成13年度調査でも出土した大木6式～7b式の以外に大木8a式～9式が出土しており、以前の調査結果から想定されていた期間よりも長く貝塚が利用されていたことが分かった。

【16次調査】

調査は、1・2Tの東壁の一部を斜面下方に向かって拡張し、貝塚の範囲の確認を行った。1Tでは、調査区の南東角から調査区の拡張を行い、東に5.4m、北に7.4mのL字状に拡張した。2Tでは、調査区北東角から中央にかけての範囲を東に向かって5.5mの位置まで拡張した。

【1T拡張部】

調査は、1Tで確認された溝状遺構及び貝層の斜面下方における分布状況の確認を行った。調査では、現地表面から50cm～70cmの深さで基盤層を確認した。確認した基盤層は1Tで確認された基盤層に該当し、上層からは縄文土器が出土したが近代の遺物も混入していたことから、近代の堆積層と判断される。

また、溝状遺構については、調査区の西壁断面にてわずかに確認できるのみで、そこから東の斜面下方に伸びている状況は確認できなかった。そのため、拡張部にまで溝状遺構が及んでいないと判断される。



図7 15・16次調査区位置図

〔2 T拡張部〕

調査は、1 Tと同様に貝層範囲の確認のため、拡張を行った。調査では、現地表面から50 cm～1 mの深さで基盤層を確認した。基盤層から上層では多量の礫と縄文土器片が出土したが近代の遺物も同様に出土している状況が確認される。これらの遺物は近代の造成により集積されたものと判断される。

これらの点から今回拡張を行った1・2 Tの延長線上の範囲では、貝層の続きは確認されず、これまでの調査で確認されていた貝層の東端を確認することができた。

【17次調査】

調査は、斜面の崩落が確認された小迫北地区の東向き斜面で行われた。小迫北地区では、平成16年(2004)に4次調査が行われており、北部の谷周辺で調査が実施された。今回17次調査が行われた箇所は、掘削が行われなかった南部の未調査箇所での調査となる。

地形は斜面頂部の平坦部から斜面下方に向かって段々状の斜面であり、造成による削平を受けている。調査が行われたのは頂部付近の一段目の法面で、確認当時は法面の表土が地滑りを起こした状態で崩落が確認された。調査では、崩落した土を除去するとともに、土砂内の遺物の回収を行った。回収後は、崩落により露出した斜面の精査・分層を行い、記録を作成した。すべての記録作業が完了した後は、除去した土砂を利用して作った土嚢を崩落した箇所に敷き詰め、その後ブルーシートで保護を行い、現状の復旧を行った。精査後の断面観察では、縄文時代晩期の土器片が出土する遺物包含層が確認された。

11. 調査のまとめ

今回の15・16次調査により、これまで中断されていた調査区の再調査が行われ、層の堆積状況や出土遺物の確認及び記録作業が行われた。平面観察により台ノ前北貝層の堆積状況及び貝層の東端を確認することができ、土層の堆積状況から貝塚形成当時の斜面には、複数の谷状地形が存在していた可能性が高いことが明らかになった。

出土遺物から、2次調査時は大木6式～大木7 b式が貝層形成の主體的な年代と考えられていたが、今回出土した遺物から新たに貝層内から大木8 a式～大木9式が確認されたことから、想定されていた年代よりも長い期間貝塚が利用されていたことがわかった。また、遺物の出土量から貝塚が形成された主體的な時期が明らかとなった。

17次調査により、浦尻貝塚小迫北地区の未調査箇所での調査が行われ、縄文時代晩期の遺物とそれを含む遺物包含層が確認された。4次調査でも同様に包含層が確認されており、今回調査が行われた南部の範囲にまで包含層が広がることが明らかとなった。



写真 12 下草刈り作業状況



写真 13 下草刈り作業後状況



写真 14 ブルーシート撤去状況



写真 15 土囊撤去状況



写真 16 貝層検出作業状況 1



写真 17 貝層検出作業状況 2



写真 18 貝層検出作業状況 3



写真 19 貝層検出作業状況 4



写真 20 15次調査区全景



写真 21 15次調査区全景



写真 22 1 T 調査区全景



写真 23 1 T 調査状況 1



写真 24 1 T 調査状況 2



写真 25 1 T 遺物出土状況 1



写真 26 1 T 遺物出土状況 2



写真 27 2 T 調査状況全景



写真 28 2 T 調査状況 1



写真 29 2 T 調査状況 2



写真 30 2 T 遺物出土状況 1



写真 31 2 T 遺物出土状況 2



写真 32 3 T 調査状況全景



写真 33 3 T 調査状況 1



写真 34 3 T 調査状況 2



写真 35 3 T 遺物出土状況 1



写真 36 3 T 遺物出土状況 2



写真 37 浦尻貝塚 15次調査出土遺物 1



写真 38 浦尻貝塚 15 次調査出土遺物 2



写真 39 浦尻貝塚 15次調査出土遺物 3

第2節 試掘調査成果

第1項 高見町C遺跡(4次調査)

- 1 調査原因 個人住宅建設
- 2 調査地点 南相馬市原町区高見町一丁目地内
- 3 調査期間 平成31年4月6日
- 4 調査対象面積 116.54㎡
- 5 調査面積 20㎡
- 6 調査担当 主査 荒 淑人
- 7 調査成果



図8 高見町C遺跡位置図 0 (S=1/5000) 100m

今回の試掘調査では、開発予定地内に幅2m×長さ10mの調査区を1箇所に設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約25cmの深さで、基盤層となる黄色ロームが確認された。基盤層を確認する過程のなかでは、遺構・遺物は確認されなかった。

8 調査所見

今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しないと考えられる。このことから改めて保存協議を行う必要はないが、周辺の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応とする。



図9 調査区位置図 0 (S=1/2500) 50m



写真40 1T全景



写真41 1T土層断面

第2項 鶴谷坂下遺跡（1次調査）

- 1 調査原因 土砂採取
- 2 調査地点 南相馬市原町区鶴谷字坂下地下内
- 3 調査期間 平成31年4月18日～4月24日
- 4 調査対象面積 28,035㎡
- 5 調査面積 60㎡
- 6 調査担当 主査 荒淑人
- 7 調査成果

試掘調査では、開発予定範囲内の2箇所に調査区を設定して埋蔵文化財の確認を行った。

調査対象地の北端に設けた調査区では、丘陵斜面を掘り込んだ横穴状の掘り込みが2カ所で確認され、横穴墓の可能性が示唆されたことから内部の堆積土を除去して横穴の有無を確認した。調査の結果、確認できた横穴の形状は長方形の箱形状の掘り方を有していることが確認された、横穴墓の特徴とは著しく異なることから、現代の防空壕であると判明した。

開発予定範囲の南部に設けた調査区は、唯一自然地形が残っている部分であることと、周囲に鉄滓の散布が認められたことから、製鉄に関連する遺構が所在している可能性が高い。そのため、トレンチを設定して埋蔵文化財の有無を確認する作業を行った。

調査の結果、丘陵斜面を造成し平坦面を造り、その上面に箱形炉が確認された。また、箱形炉の上位の堆積土には厚く堆積した炭化物を含む黒色土が堆積していることから、箱形炉が操業停止した後に上位に木炭窯が構築されていた可能性がある。

8 調査所見

今回の試掘調査では、開発予定地の南部で製鉄関連の遺構が確認されたことから、今回の開発計画に対しては、確認された埋蔵文化財を保護するための措置が必要と判断され、現状での保存が困難な場合には記録保存のための発掘調査を要する。



図10 鶴谷坂下遺跡位置図

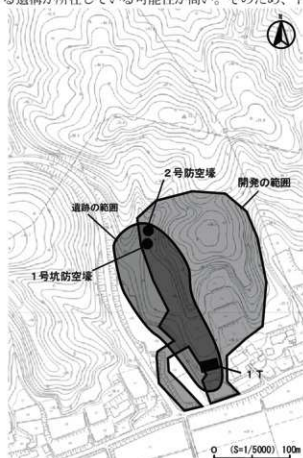
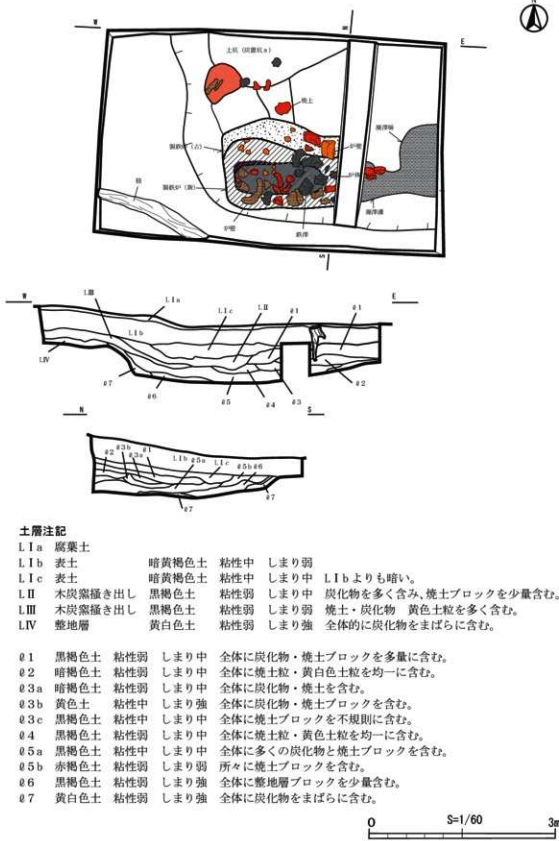


図11 開発範囲・調査区位置図



土層注記

L.I a	腐葉土				
L.I b	表土	暗黄褐色土	粘性中	しまり弱	
L.I c	表土	暗黄褐色土	粘性中	しまり中	L.I b よりも暗い。
L.II	木炭窯種き出し	黒褐色土	粘性弱	しまり中	炭化物を多く含み、焼土ブロックを少量含む。
L.III	木炭窯種き出し	黒褐色土	粘性弱	しまり弱	焼土・炭化物 黄色土粒を多く含む。
L.IV	整地層	黄白色土	粘性弱	しまり強	全体的に炭化物をまばらに含む。

#1	黒褐色土	粘性弱	しまり中	全体に炭化物・焼土ブロックを多量に含む。
#2	暗褐色土	粘性弱	しまり中	全体に焼土粒・黄白色土粒を均一に含む。
#3 a	暗褐色土	粘性弱	しまり中	全体に炭化物・焼土を含む。
#3 b	黄色土	粘性中	しまり強	全体に炭化物・焼土ブロックを含む。
#3 c	黒褐色土	粘性中	しまり中	全体に焼土ブロックを不規則に含む。
#4	黒褐色土	粘性弱	しまり中	全体に焼土粒・黄色土粒を均一に含む。
#5 a	黒褐色土	粘性中	しまり中	全体に多くの炭化物と焼土ブロックを含む。
#5 b	赤褐色土	粘性弱	しまり弱	所々に焼土ブロックを含む。
#6	黒褐色土	粘性弱	しまり強	全体に整地層ブロックを少量含む。
#7	黄白色土	粘性弱	しまり強	全体に炭化物をまばらに含む。

図 12 1 T 製鉄炉跡検出状況



写真42 防空壕確認状況



写真43 防空壕調査状況



写真44 1号防空壕



写真45 1号防空壕



写真46 1号防空壕



写真47 2号防空壕



写真48 2号防空壕



写真49 2号防空壕



写真 50 1 T 全景



写真 51 製鉄炉跡全景



写真 52 製鉄炉跡全景



写真 53 炉体全景



写真 54 炉体全景

第3項 東迫B遺跡（1次調査）

- 1 調査原因 土砂採取
- 2 調査地点 南相馬市小高区上根沢字
東迫地内
- 3 調査期間 令和元年6月7日～
6月28日
- 4 調査対象面積 12,404㎡
- 5 調査面積 99.15㎡
- 6 調査担当 主任文化財主事 佐川 久
- 7 調査成果

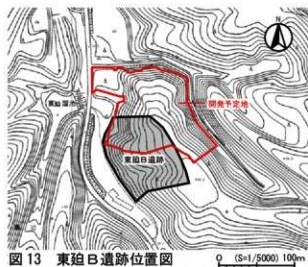


図13 東迫B遺跡位置図

今回の開発計画に伴い表面調査を実施し、開発予定地内に1箇所、開発予定地隣接地で2箇所の廃滓場（1～3号廃滓場）を確認した。このため、開発予定地内に調査区を35箇所に設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。試掘調査では、現地表面から約35～110cmの深さで基盤層となる明黄褐色砂質土が確認された。基盤層に到達するまでの過程では、遺構・遺物の埋蔵文化財は確認されなかった。これらの調査結果を踏まえ、1～3号廃滓場を含む範囲を「東迫B遺跡」として福島県埋蔵文化財包蔵地台帳に登録を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地とした。

8 調査所見

今回の調査では、表面調査で確認した廃滓場以外の埋蔵文化財は確認されなかった。したがって、廃滓場と製鉄炉の推定範囲が保存協議の対象範囲となり、埋蔵文化財の保存が困難な場合には、記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。



図14 調査区位置図



写真 55 製鉄炉推定範囲



写真 56 鉄滓分布状況



写真 57 20 T 全景



写真 58 23 T 全景



写真 59 25 T 全景

第4項 天梅B遺跡(1次調査)

- 1 調査原因 土砂採取
- 2 調査地点 南相馬市小高区金谷字天梅
地内
- 3 調査期間 令和元年6月17日～
7月3日・8月8日
- 4 調査対象面積 42,317.04㎡
- 5 調査面積 347㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
- 7 調査成果



図15 天梅B遺跡位置図

開発予定地内に2×10mの調査区を15箇所、幅1mの調査区を13箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約20～40cmの深さで黄褐色土の基盤層を確認した。基盤層より上層は盛土であり、過去に造成が行われたと判断される。遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑11基、ピット1基、木炭窯跡3基が確認された。遺物は前期の縄文土器片が出土している。

2 Tでは、調査区の東壁にて竪穴住居跡(S I 3)が確認されたが、北西角の一部のみが確認されており、全体の形状や規模は不明である。また、遺物は確認されなかった。

4 Tでは、調査区の中央にて竪穴住居跡(S I 1)が確認された。北西角と南西角が確認されており、西辺は全体、北辺・南辺は一部が検出した。全体の正確な規模は不明であるが、西辺の長さから推測するに、約3.6m角の隅丸形状であると推測される。遺物は竪穴住居跡の検出面上面から、縄文時代前期の土器片が出土している。

5 Tでは、調査区の中央と北端で竪穴住居跡1軒(S I 2)と土坑2基(S K 1・2)が確認された。竪穴住居跡は、検出時は幅約2mの溝状遺構と考えられたが、北辺で確認された遺構の立ち上がりが南辺では確認されず、検出された箇所が緩斜面であったこと、過去に造成が行われていることから、竪穴住居跡の一部が削平された可能性が高いと判断される。また、竪穴住居跡から縄文時代前期の土器片が出土しており、付近で確認された土坑(S K 1)及びピット(P 1)の検出面からも同時期と考えられる縄文土器片が出土していることから、本来は土坑の位置まで竪穴住居跡が所在していたと考えられる。



図16 調査区位置図

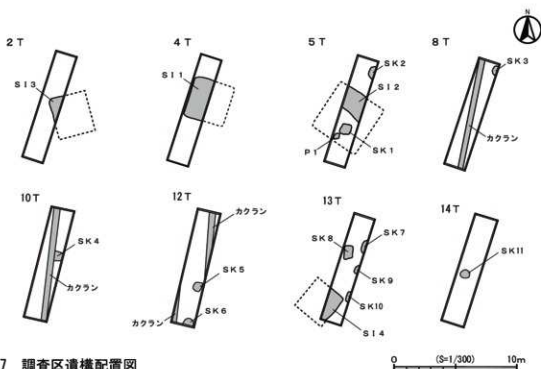


図 17 調査区遺構配置図

8 Tでは、調査区の北端にて土坑 1 基(S K 3)が確認された。壁面付近にて一部のみが確認されており、遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

10 Tでは、溝状の攪乱に切られる形で土坑 1 基(S K 4)が確認された。大部分が攪乱の掘削を受けており、本来の形状や規模は不明。遺構上面からは多量の炭化物と焼土ブロックが確認されたが遺物は出土せず、時期は不明である。

12 Tでは、調査区南側で土坑 2 基(S K 5・6)を確認した。S K 5はやや歪な円形を呈し、一部を掘り下げた結果、深さ約60cmを測る。堆積土中からは寛永通宝と煙管の一部が出土していることから、江戸時代の土壌墓であると考えられる。S K 6は南壁面にて一部が確認されている。遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

13 Tでは、竪穴住居跡 1 軒(S I 4)と土坑 4 基(S K 7～10)が確認された。竪穴住居跡は東角とそこから伸びる北東辺と南東辺の一部が確認されており、全体の形状や規模は不明である。遺物は縄文前期の土器片が出土している。土坑は調査区東壁沿いと中央で確認された。遺物は少量ではあるが縄文前期の土器片が出土した。

17～20 Tでは、現地表面から約40～60cmの深さで炭化物を含んだ黒色土が検出した。遺物は出土しなかったため、正確な年代は不明であるが、付近に製鉄遺跡である「天梅遺跡」が所在するため、製鉄に関連した遺構の可能性が高い。

8 調査所見

調査の結果、開発予定地内において集落跡及び製鉄関連遺構が確認された。埋蔵文化財が確認された箇所及び周辺において開発行為を行う場合は、事前に保存協議が必要となる。保存協議の結果、埋蔵文化財の保存が困難な場合には、記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。



写真 60 調査前状況全景



写真 61 2T調査状況



写真 62 2TSI3検出状況



写真 63 4T調査状況



写真 64 4TSI1検出状況



写真 65 5T調査状況



写真 66 5TSI2検出状況



写真 67 5TSK1・P1検出状況



写真 68 5T SK 2 検出状況



写真 69 13T 調査状況



写真 70 13T S 1 4 検出状況



写真 71 13T SK 8 検出状況



写真 72 17T 調査状況



写真 73 17T 木炭窯跡検出状況



写真 74 19T 調査状況



写真 75 19T 木炭窯跡検出状況

第5項 榑現沢遺跡（1次調査）

- 1 調査原因 太陽光発電設備設置
- 2 調査地点 南相馬市鹿島区寺内字榑現沢
地内
- 3 調査期間 令和元年7月2日～7月10日
- 4 調査対象面積 8,336㎡
- 5 調査面積 120㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
- 7 調査成果



図18 榑現沢遺跡位置図

開発予定地内に2×10mの調査区を6箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約80～120cmの深さで黄褐色土の基盤層を確認した。遺物の散布が想定されたが、調査区内からは保存協議を要する遺構・遺物は確認されなかった。

8 調査所見

調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応が望ましい。



図19 調査区位置図



写真76 1T調査状況



写真77 4T調査状況

第6項 池ノ沢遺跡(3次調査)

- 1 調査原因 土砂採取
- 2 調査地点 南相馬市小高区神山字池ノ沢
地内
- 3 調査期間 令和元年9月17日～
令和2年1月24日
- 4 調査対象面積 60,935㎡
- 5 調査面積 492㎡
- 6 調査担当 主任文化財主事 佐川 久
- 7 調査成果



図20 池ノ沢遺跡位置図

今回の開発計画に伴い、事前に表面調査を実施し、3箇所の廃滓場(図21 廃2～4)を確認した。また、林道整備時の掘削の断面で、1箇所の木炭窯(図21 窯2)を確認した。

試掘調査は、開発予定地内に61箇所(1～61 T)の調査区を設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。11 Tでは、焼土を含む炭化物層の堆積と溝跡が確認された。これらは、製鉄炉構築の際に除湿のために敷設した炭化物層、製鉄炉に伴う排水溝と推測される(図21 炉1)。45 Tでは、2つの土坑状の平面プランを確認した。45 Tは遺構確認面を検出するまでの過程で鉄滓・羽口が多量に出土したこと、周囲には箱型炉を構築する際に平場を形成するための切出し部と考えられる地形があることから、45 Tで確認された土坑状の平面プランは、箱型炉の踏みフイゴのプランと推測される(図21 炉2)。45 Tを設定した場所の南東側は農地造成の際に削平されており、炉の本体と廃滓場はすでに失われている。30 Tで、廃滓場の一部と推測される鉄滓・炭化物・焼土を多量に含む黒色土の堆積を確認(図21 廃1)したため、斜面上位の平坦部に製鉄炉の検出を目的として33・34 Tを設定し、調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。30 Tと33・34 Tの間は、急傾斜で箱型炉を構築できる平場がないことから、30 Tで確認された廃滓場は壱型炉に伴うものと推測される。44 Tは、斜面に直交する溝状の窪みに設定した調査区で、調査区の西側で暗褐色土の堆積を確認した。周囲の地形から木炭窯(図21 窯3)と考えられる。隣接して窯2が確認されており、44 Tの周辺には、複数の木炭窯が構築されていた可能性が考えられる。

8 調査所見

今回の調査では、奈良・平安時代の製鉄炉をはじめ製鉄関連の遺構が複数確認された。したがって、製鉄関連が確認された範囲及び製鉄関連の遺構が展開する可能性がある範囲が保存協議の対象範囲となる。保存協議の結果、埋蔵文化財の保存が困難な場合には、記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。

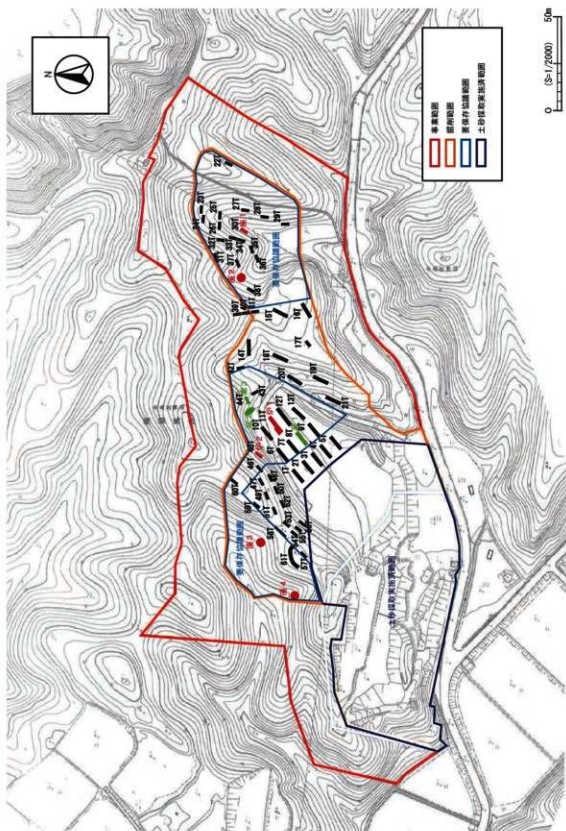


図 21 調査区配置図



写真 78 8 T 1号木炭窯（窯1）検出状況



写真 79 11 T 1号製鉄炉（炉1）検出状況



写真 80 2号木炭窯（窯2）検出状況



写真 81 30 T 1号廃滓場（廃1）検出状況



写真 82 2号廃滓場（廃2）検出状況



写真 83 2号廃滓場（廃2）鉄滓散布状況



写真 84 44 T 3号木炭窯（窯3）検出状況



写真 85 45 T 2号製鉄炉（炉2）検出状況



写真 86 3号廃滓場（廃3）検出状況



写真 87 3号廃滓場（廃3）鉄滓散布状況



写真 88 4号廃滓場（廃4）検出状況



写真 89 4号廃滓場（廃4）鉄滓散布状況



写真 90 7T全景



写真 91 15T全景



写真 92 41T全景



写真 93 58T全景

第7項 中村平遺跡(4次調査)

- 1 調査原因 個人住宅建設
- 2 調査地点 南相馬市小高区吉名字中村平地内
- 3 調査期間 令和元年10月7日～
10月9日
- 4 調査対象面積 968.60㎡
- 5 調査面積 20㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江
- 7 調査成果



図22 中村平遺跡位置図

今回の試掘調査では、開発予定地内に幅2m×長さ10mの調査区を1箇所設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約30～40cmの深さで、黄褐色土の基盤層が確認された。基盤層までの上位層から遺構・遺物は確認されなかった。

8 調査所見

今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しないと考える。このことから改めて保存協議を行う必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応が望ましい。



図23 調査区位置図



写真94 調査前状況



写真95 1T調査状況

第8項 原B遺跡(1次調査)

- 1 調査原因 自動車工場兼事務所建設
- 2 調査地点 南相馬市原町区馬場字原地内
- 3 調査期間 令和元年11月11日
- 4 調査対象面積 2,531.75㎡
- 5 調査面積 40㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江
- 7 調査成果



図24 原B遺跡位置図

今回の試掘調査では、開発予定地内に幅2m×長さ10mの調査区を2箇所設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約110～125cmの深さで、黄褐色土の基盤層が確認された。基盤層までの上位層から遺構・遺物は確認されなかった。

8 調査所見

今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しないと考える。このことから改めて保存協議を行う必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応が望ましい。



図25 調査区位置図



写真96 1T調査状況



写真97 2T調査状況

第9項 桜井B遺跡(15次調査)

- 1 調査原因 個人住宅建設
- 2 調査地点 南相馬市原町区上渋佐字原田
地内
- 3 調査期間 令和2年1月10日
- 4 調査対象面積 292.93㎡
- 5 調査面積 13.4㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
- 7 調査成果



図26 桜井B遺跡位置図

開発予定地内に幅2mの調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約130cmの深さで黄褐色土の基盤層を確認した。基盤層から上層は、造成による盛土であり、基盤層を確認するまでの過程で遺構・遺物は確認されなかった。

8 調査所見

調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応が望ましい。

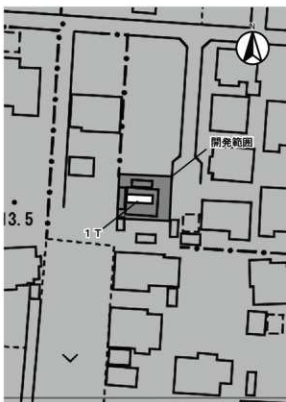


図27 調査区位置図



写真98 調査前状況



写真99 1T調査状況

第10項 熊平B遺跡(1次調査)

- 1 調査原因 太陽光発電設備設置
- 2 調査地点 南相馬市小高区小谷字
摩辰地内
- 3 調査期間 令和2年1月9日～
1月10日
- 4 調査対象面積 932㎡
- 5 調査面積 60㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江
- 7 調査成果



図28 熊平B遺跡位置図

今回の試掘調査では、開発予定地内に幅2m×長さ10mの調査区を3箇所設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約40～70cmの深さで、黄褐色土の基盤層が確認された。基盤層までの上位層から遺構・遺物は確認されなかった。

8 調査所見

今回の試掘調査により、開発範囲において保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、開発範囲を含むその周辺に遺構は展開しないと考える。このことから改めて保存協議を行う必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応が望ましい。



図29 調査区位置図



写真100 1 T調査状況



写真101 3 T調査状況

第11項 荒神前遺跡(9次調査)

- 1 調査原因 車庫建築
- 2 調査地点 南相馬市小高区片草字荒神前地内
- 3 調査期間 令和2年1月20日～1月21日
- 4 調査対象面積 182㎡
- 5 調査面積 6.9㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
- 7 調査成果



図30 荒神前遺跡位置図

開発予定地内に1m×5mの調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約35cmの深さで古代の竪穴住居跡(SI1)1軒を確認し、その後状況確認のため調査区を拡張した。調査区の北西壁付近で確認された竪穴住居跡は、南西角のみが確認されており、全体の規模は不明である。遺物は竪穴住居跡の上面から土師器片が数点出土している。

8 調査所見

調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財が確認された。しかし、開発工事の内容から遺構検出前まで掘削が及ばないため、改めた発掘調査及び保存協議の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから工事立会による対応が望ましい。

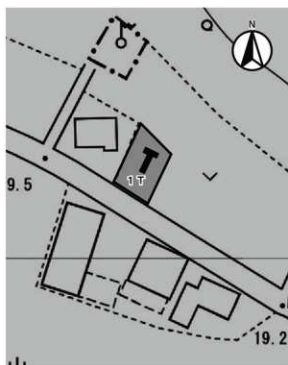


図31 調査区位置図



図32 1 T平面図



写真 102 調査前状況全景



写真 103 作業状況



写真 104 1 T 調査状況



写真 105 1 T S I 1 検出状況



写真 106 1 T S I 1 検出状況



写真 107 1 T S I 1 検出状況

第12項 栗成沢遺跡(1次調査)

- 1 調査原因 農地造成
- 2 調査地点 小高区上根字栗成沢地内
- 3 調査期間 令和2年1月27日～3月12日
- 4 調査対象面積 17,853㎡
- 5 調査面積 669㎡
- 6 調査担当 主任文化財主事 佐川 久
- 7 調査成果



図33 栗成沢遺跡位置図 (S=1/10000) 250m

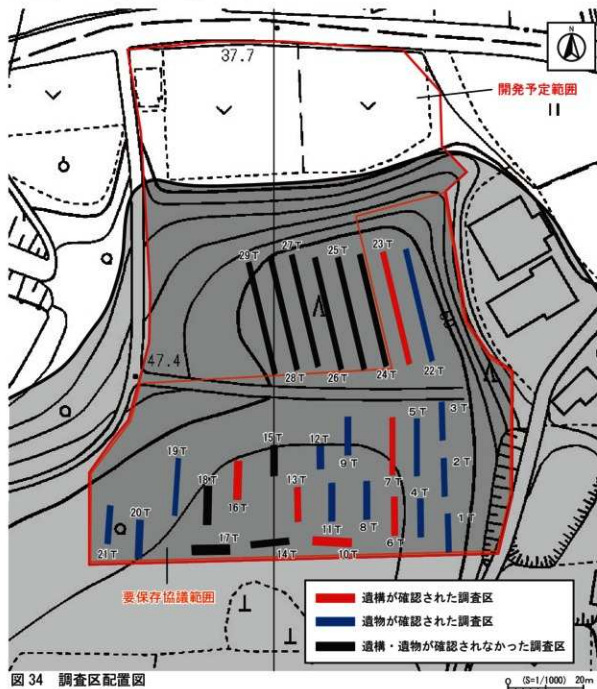
調査では、開発予定地内に調査区を21箇所(1～21T)に設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。

13・16Tで竪穴住居跡(S I 1・2)が確認された(図35)。S I 1は、検出された長軸が約5.2mを測る。床面までの深さは約18～25cmで、やや緩やかに立ち上がる。床面は北に向かい緩やかに下がる。灰跡等は確認されなかったが、柱穴と思われるピット群が確認された。遺構内から遺物は出土しなかったが、周囲の調査区から出土する遺物はほとんどが縄文時代前期初頭の土器であることから、S I 1は同時期の構築と推測される。S I 2は、検出された長軸が約3.1mを測る。床面までの深さは、約8～25cmで、緩やかに立ち上がる。床面は南に向かい緩やかに上がる。サブレンチ北西隅で灰跡を確認したが、柱穴等は確認されなかった。S I 2からは、図36-1～7が出土している。1は口縁部直下に、縄圧痕を用いて渦巻状の文様を描出している。2・5は横位に隆帯を貼付し、縄文を施している。3～7は羽状縄文が施されている。これらの土器は縄文時代前期初頭の土器であることから、S I 2の構築時期は縄文時代前期初頭と考えられる。

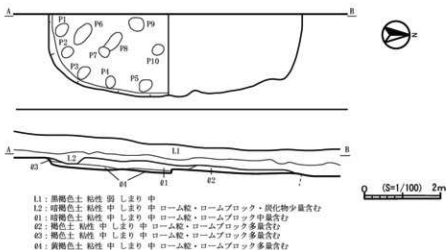
6・7・10・23Tでは、土坑(S K 1～4)が確認された(図35)。S K 1の平面プランは円形を呈し、検出された長軸が約87cmを測る。S K 1からは、図36-9・10が出土している。9・10は同一個体で、口縁直下に横位の隆帯を貼付し、縄文を施し、地文には羽状縄文が施されている。これらの土器は縄文前期初頭の土器であることから、S K 1の構築時期は縄文時代前期初頭と考えられる。S K 2の平面プランは円形を呈し、検出された長軸が約1.2mを測る。S K 2からは、小片であるが、縄文前期初頭の土器出土していることから、S K 2の構築時期は縄文時代前期初頭と考えられる。S K 3の平面プランは不整形な楕円形を呈し、検出された長軸が約1.5mを測る。S K 3からは、図36-8が出土している。8は羽状縄文が施されており、縄文時代前期初頭に比定されることから、S K 3の構築時期は縄文時代前期初頭と考えられる。S K 4の平面プランは隅丸長方形を呈しており、壁面が被熱で焼土化している。遺構内の堆積土は炭化物・焼土を多量に含んでいることから、S K 4は古代の木炭焼成土坑と考えられる。このほかに複数の調査区の遺構確認面から縄文前期初頭の土器(図36-11～18)が出土している。17はループ文が施文される。18は尖底部で外面にはヘラケズリが施されている。なお、図36に示した縄文土器のすべてに繊維が混入している。

8 調査所見

今回の調査では、縄文時代前期初頭の竪穴住居跡等の遺構が確認されたこと、開発予定地の広範囲にわたり縄文時代前期初頭の土器が出土しており、当該期の遺構がその範囲に展開する可能性があることから、図34に示した範囲が保存対象範囲となる。埋蔵文化財の保存が困難な場合には、記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。



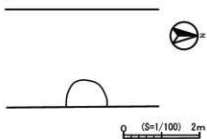
13 T S I 1



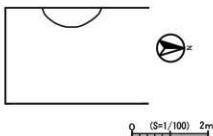
16 T S I 2



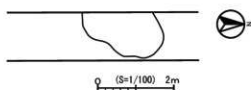
6 T S K 1



7 T S K 2



23 T S K 3



10 T S K 4

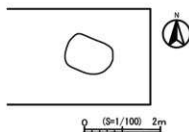


図 35 遺構平面図・断面図

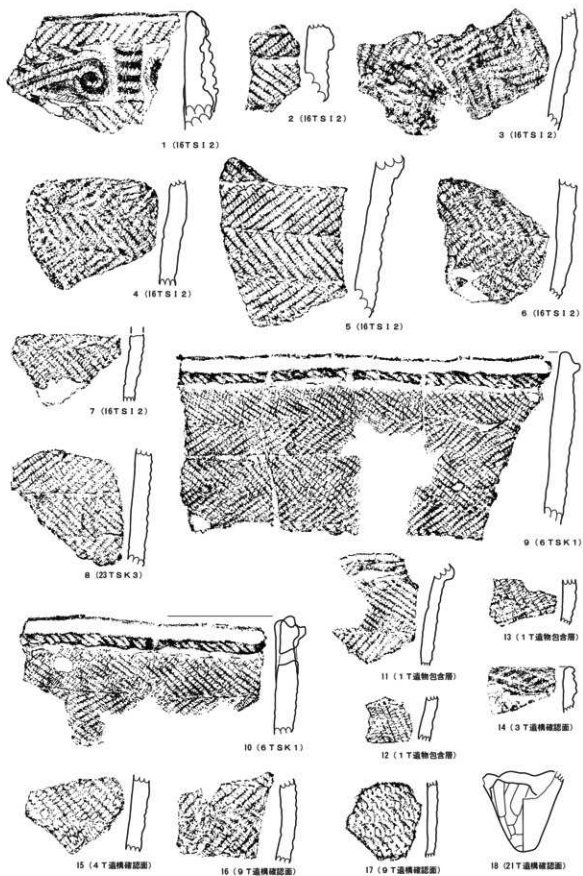


図 36 栗成沢遺跡 1 次調査出土遺物

0 (S-1/3) 10cm



写真 108 13T 全景



写真 109 13T S I 1 調査状況①



写真 110 13T S I 1 調査状況②



写真 111 13T S I 1 土層堆積状況



写真 112 16T 全景



写真 113 16T S I 2 調査状況



写真 114 16T S I 2 炉跡検状況



写真 115 16T S I 2 土層堆積状況



写真116 6T全景



写真117 6TSK1検出状況



写真118 7T全景



写真119 7TSK2検出状況



写真120 23T全景



写真121 23TSK3検出状況



写真122 10T全景



写真123 10TSK4検出状況

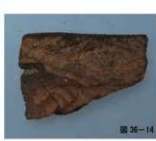
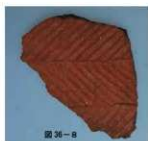
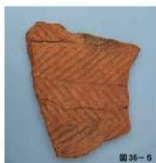
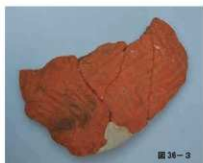


写真124 栗成沢遺跡1次調査出土遺物

第13項 東広畑A遺跡(1次調査)

- 1 調査原因 太陽光発電設備設置
- 2 調査地点 南相馬市小高区小高字東広畑
地内
- 3 調査期間 令和2年2月3日～2月7日
- 4 調査対象面積 1,093㎡
- 5 調査面積 93㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
- 7 調査成果



図37 東広畑A遺跡位置図

開発予定地内に幅2mの調査区を4箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約40cmの深さで基盤層である黄褐色土層を確認した。この層の上面において遺構確認をしたところ、1～3Tで竪穴住居跡8軒、ピット2基が確認された。竪穴住居跡はいずれも調査区の東端で重複する形で検出しており、遺構内からは土師器片と須恵器片が出土している。

8 調査所見

調査の結果、開発予定地内において、複数軒の竪穴住居跡が確認されたことから、古代の集落跡が存在する可能性が高いと考えられる。埋蔵文化財が確認された箇所において開発行為を行う場合は事前に保存協議を要し、保存が困難な場合には、記録保存を目的とした発掘調査が必要となる。



図38 調査区位置図

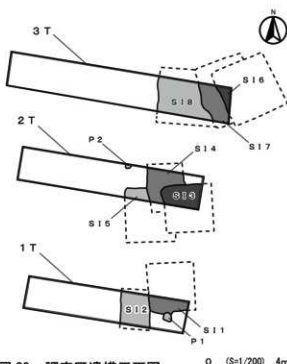


図39 調査区遺構平面図



写真 125 調査区全景



写真 126 1 T調査状況



写真 127 1 T S I 1・2 検出状況



写真 128 2 T 検出状況



写真 129 2 T S I 3・4・5 T 検出状況



写真 130 3 T調査状況



写真 131 3 T S I 6・7・8 検出状況



写真 132 4 T調査状況

第14項 中村平遺跡（5次調査）

- 1 調査原因 個人住宅建設
- 2 調査地点 南相馬市小高区吉名字中村平地内
- 3 調査期間 令和2年2月12日
- 4 調査対象面積 267.31㎡
- 5 調査面積 10.0㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
- 7 調査成果



図40 中村平遺跡位置図

開発予定地内に2m×5mの調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約75cmの深さで黄褐色土の基盤層を確認した。基盤層から上層は盛土であり、基盤層を確認するまでの過程で遺構・遺物は確認されなかった。

8 調査所見

調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応が望ましい。



図41 調査区位置図



写真133 調査前状況



写真134 1 T 調査状況

第15項 御所内遺跡(2次調査)

- 1 調査原因 個人住宅建設
- 2 調査地点 南相馬市鹿島区横手字御所内
地内
- 3 調査期間 令和2年2月20日
- 4 調査対象面積 628.41㎡
- 5 調査面積 20㎡
- 6 調査担当 主任文化財主事 佐川 久
- 7 調査成果



図42 御所内遺跡位置図

今回の試掘調査では、開発予定地内に幅2m×長さ10mの調査区を1箇所に設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。試掘調査では、現地表面から約50～150cmの深さまで掘削を行った。調査区内には盛土が確認されたが、盛土内からは丸釘等の近代以降所産の遺物が出土したことから、開発予定地は近代以降に盛土を実施し、住宅地として造成したと判断される。今回の開発では、掘削が盛土内で収まることから、基盤層に到達する前に調査を中止した。

8 調査所見

今回の試掘調査では、保存協議を必要とする埋蔵文化財は確認できなかったため、改めて保存協議を行う必要はないが、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応とする。



図43 調査区位置図



写真135 1T全景



写真136 1T掘削状況

第16項 中ノ内遺跡(1次調査)

- 1 調査原因 太陽光発電設備設置
- 2 調査地点 南相馬市小高区小谷字前畑地内
- 3 調査期間 令和2年2月25日～2月26日
- 4 調査対象面積 7,012㎡
- 5 調査面積 40㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
- 7 調査成果



図44 中ノ内遺跡位置図

試掘調査では、開発予定地内に2×10mの調査区を2箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約55～60cmの深さで黄褐色土の基盤層(遺構検出面)を確認した。遺構検出面からは、土坑1基と28基のピット群が検出し、内3基は柱穴の可能性が高く、堆積土内から土師器片が出土している。検出した柱穴は一部のみで、全体の規模が不明であるが、令和元年に当開発予定地の南西部の北向き斜面にて、県文化財課による試掘調査の結果、遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が確認されている。このことから、今回の試掘調査で確認された柱穴も掘立柱建物跡あるいは柵列の可能性が高いと考えられる。

今回調査を行った中ノ内遺跡の調査結果を含め、周辺には土師器・須恵器の散布が確認されている遺跡が複数所在しており、大規模な集落が形成されていた可能性が考えられる。

8 調査所見

調査の結果、開発範囲内で古代の集落の一部と考えられる遺構が確認された。これらの遺構は、保存協議を要する遺構であるが、開発工事の計画内容から確認された遺構への影響は最小限に留まることから、改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから工事立会による対応が望ましい。

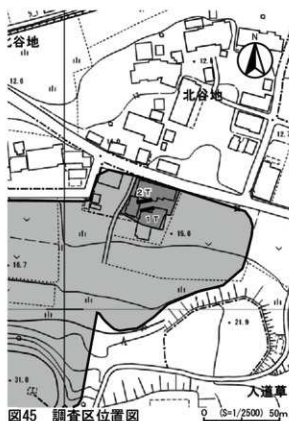


図45 調査区位置図

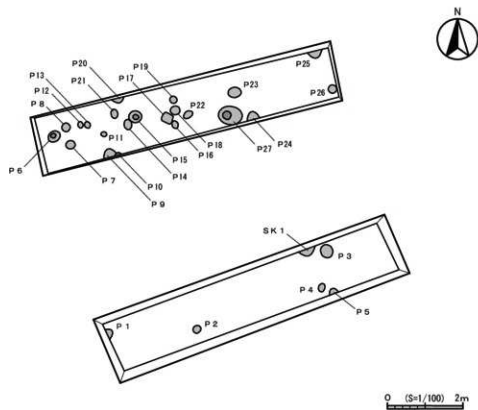


図 46 調査区平面図



写真 137 1 T 調査状況



写真 138 1 T ビット検出状況



写真 139 2 T 調査状況



写真 140 2 T ビット検出状況

第17項 池ノ沢B遺跡(2次調査)

- 1 調査原因 土砂採取
- 2 調査地点 南相馬市小高区神山字池ノ沢
地内
- 3 調査期間 令和2年3月12日～3月18日
- 4 調査対象面積 8,350㎡
- 5 調査面積 40.4㎡
- 6 調査担当 主任文化財主事 佐川 久
- 7 調査成果

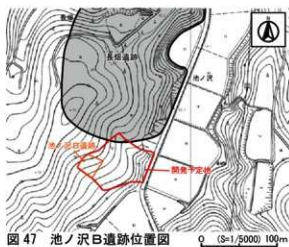


図47 池ノ沢B遺跡位置図

開発予定地の一部が、周知の埋蔵文化財包蔵地である「長畑遺跡」の範囲に該当することから、埋蔵文化財の有無及びその広がりを確認するため、平成29年度に7箇所(1～7 T)を設定して試掘調査(1次調査)を実施した。その結果、5 Tで製鉄関連遺構と推測される遺構が確認されたため、開発予定地の一部でさらに詳細な試掘調査の実施が必要となった。

今回の試掘調査(2次調査)は、土砂採取が可能な範囲を確定させるために、1次調査で確認された製鉄関連遺構にかかわる埋蔵文化財の広がりを確認することを目的として実施したものである。2次調査は、開発予定地内に調査区を17箇所(8～24 T)設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。2次調査の調査区番号は、1次調査の調査区番号の連番とした。8～24 Tでは、現地表面から約50～80cmの深さで基盤層となる褐色～黄褐色砂質土が確認された。基盤層に到達するまでの過程では、少量の鉄滓が出土したが、遺構等の埋蔵文化財は確認されなかった。また、1次調査の5 Tの製鉄関連遺構を再度検出し、土層の堆積状況等を改めて確認した。

なお、1次調査及び2次調査の結果から、5 Tで確認された製鉄関連遺構と周知の埋蔵文化財包蔵地である「長畑遺跡」の範囲の間には、埋蔵文化財が確認されない範囲があることから、「長畑遺跡」の範囲の変更増補を行うのではなく、別の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うことが適切と判断し、「池ノ沢B遺跡」として福島県埋蔵文化財包蔵地台帳に登録を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地とした。その範囲については、試掘調査の成果及び地形に基づいて設定した要保存協議範囲と同一にした。

8 調査所見

1次調査及び2次調査では、5 Tで確認された製鉄関連遺構以外に保存協議が必要な埋蔵文化財は確認されなかったことから、5 Tとその周囲が保存協議の対象範囲となる。保存協議の結果、埋蔵文化財の保存が困難な場合には、記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。

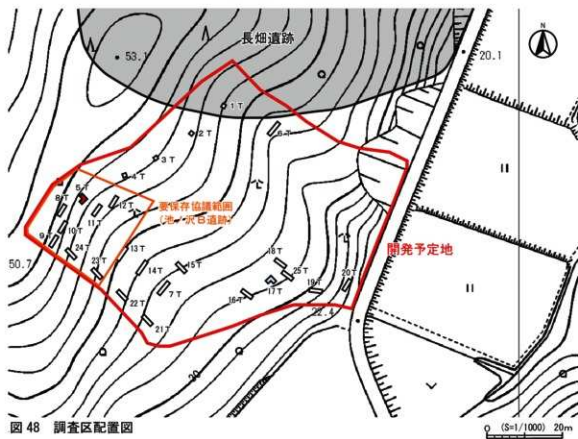


図 48 調査区配置図



写真 141 5T 全景



写真 142 14T 全景



写真 143 17T 全景



写真 144 21T 全景

第18項 大田和広畑遺跡(9次調査)

- 1 調査原因 太陽光発電設備設置
- 2 調査地点 南相馬市小高区大田和字広畑
地内
- 3 調査期間 令和2年3月24日～3月25日
- 4 調査対象面積 7,012㎡
- 5 調査面積 43.6㎡
- 6 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
- 7 調査成果



図49 大田和広畑遺跡位置図

開発予定地内に幅2mの調査区を2箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。調査の結果、現地表面から約90～150cmの深さで黄褐色土の基盤層を確認した。基盤層から上層は造成による盛土であり、基盤層を確認するまでの過程で、保存協議を要する遺構・遺物は確認されなかった。

8 調査所見

調査の結果、開発予定地内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから改めた発掘調査等の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発であることから慎重工事による対応が望ましい。



図50 調査区位置図



写真145 1T調査状況



写真146 3T調査状況

第19項 明神館跡(1次調査)

- 1 調査原因 法面整形
- 2 調査地点 南相馬市原町区上大甕字館地内
- 3 調査期間 令和2年3月23日～
3月30日
- 4 調査対象面積 3,962㎡
- 5 調査面積 27.5㎡
- 6 調査担当 主任文化財主事 佐川 久
- 7 調査成果



図51 明神館跡位置図

開発予定地は、江戸時代末期に編纂された中村藩の歴史地理書である「奥相志」のなかで、中世に築かれた「明神古館」に比定された場所にあたる。このため調査では、開発予定地内に調査区を3箇所(1～3 T)に設定して、埋蔵文化財の有無の確認を行った。1・2 Tは主郭と考えられる丘陵頂部の平坦面に設定した調査区である。1 Tでは、約50cmの深さで基盤層に到達し、28基のピットが確認された。調査区が狭いため、建物等の復元はできなかったが、確認されたピットは館跡に関連する柱穴等と考えられる。また、ピットには切り合いが認められることから、建物等の造替えが行われたと考えられる。2 Tでは、約50cmの深さで基盤層に到達し、ピット4基と1条の溝が確認された。1 Tと同様に調査区が狭いため、建物等の復元はできなかったが、確認されたピットは館跡に関連する柱穴等と推測される。3 Tは、「奥相志」で西部とされる日祭神社の東側の平坦面に設定した調査区である。この平坦面は、自然地形を人為的に掘削して形成されている。3 Tでは、館跡に伴うと推測される遺構は確認されなかったが、古代の木炭焼成土坑と推測される土坑が確認された。

開発予定地は、独立丘陵に近い地形で、丘陵頂部の平坦面からは、北を除く三方向が良く見渡せ、城館を築くのに適した場所である。また、丘陵頂部の周囲には、人為的に形成されたとみられる平坦面が認められる。さらに、今回の調査の1・2 Tで複数のピットが確認されたことから、主郭と考えられる丘陵頂部の平坦面には、多数のピットが存在すると考えられ、建物等の施設が存在が想定される。これらの点から、「奥相志」の記述どおり「明神古館」は、本開発予定地とその周囲であるの可能性があると言えるが、今回の調査では、遺構の年代の決定にかかわる遺物が出土していないことから断定することはできない。

8 調査所見

今回の調査では、館跡に関連する柱穴等と考えられるピットおよび館跡に伴うと推測される平坦面が確認されている。したがって、今回の開発予定地全体が保存協議の対象範囲となり、埋蔵文化財の保存が困難な場合には、記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。

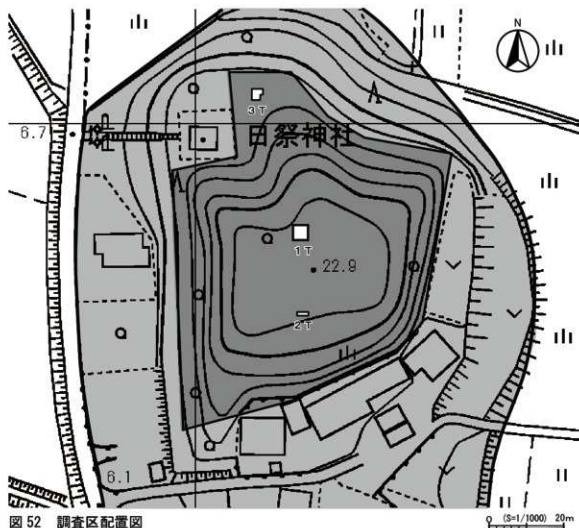


図 52 調査区配置図

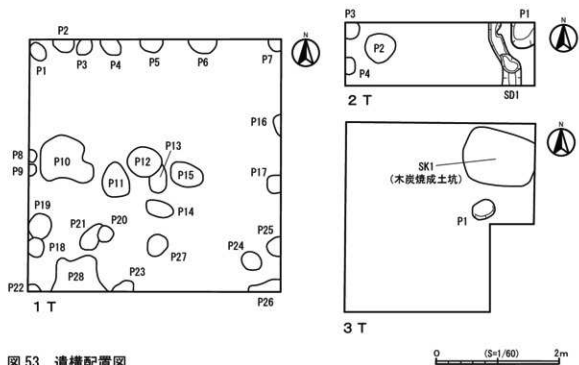


図 53 遺構配置図



写真 147 1T全景①



写真 148 1T全景②



写真 149 1Tピット検出状況①



写真 150 1Tピット検出状況②



写真 151 2T全景



写真 152 2TP1・SD1調査状況



写真 153 3T全景



写真 154 3TSK1検出状況

第IV章 真野20号墳のテフラ学分析

1. はじめに

南相馬市鹿島区寺内地区内に所在する真野20号古墳の3T内の調査において、溝SD1の ℓ 1層中に白色軽石が検出された。ここでは、この白色軽石混じり土について、鉱物組成、火山ガラスの形態分類および屈折率測定を行い、テフラの検討を行った。

2. 試料と方法

分析試料は、溝SD1から検出された白色軽石混じり土1点である(表2)。

試料は、以下の方法で処理した。

湿潤重量22g程度を秤量した後、1 ϕ (0.5mm)、2 ϕ (0.25mm)、3 ϕ (0.125mm)、4 ϕ (0.063mm)の4枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。4 ϕ 篩残渣について、重液(テトラプロモエタン、比重2.96)

分析No	遺跡名	位置	層位	特徴
1	真野20号古墳	3T SD1	ℓ 1層	白色軽石混じり土(暗褐色、10YR3/3)

表2 テフラ試料の詳細

を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。軽鉱物は、水浸の簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井(2003)の分類基準に従って、バブル型平板状(b1)、バブル型Y字状(b2)、軽石型繊維状(p1)、軽石型スポンジ状(p2)、急冷破砕型フレーク状(c1)、急冷破砕型塊状(c2)に分類した。重鉱物は、封入剤レークサイドセメントを用いてプレパラートを作製し、斜方輝石(Opx)、単斜輝石(Cpx)、角閃石(Ho)、磁鉄鉱(Mg)等を同定・計数した。4 ϕ 軽鉱物中の軽石型火山ガラスは、横山ほか(1986)に従い、温度変化型屈折率測定装置(株式会社古澤地質製、MAIOT)を用いて屈折率測定を行った。

3. 結果

以下に、鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率測定の結果について述べる。

分析試料は、白色軽石混じり土(暗褐色、10YR 3/3)である。篩分けした結果、3 ϕ 篩残渣が最も多かった。4 ϕ 粒子の重液分離では、軽鉱物の割合が非常に高い(表3)。

軽鉱物では、長石(Pl)が多く検出された。火山ガラスは、少ないものの軽石型スポンジ状ガラス(p2)が検出された(図版1-5)。なお、計数した火山ガラス以外にも、バブル型ガラスやガラスが付

分析No	処理重量(g)	砂粒分の粒度組成(重量g)				軽・重鉱物組成(重量g)	
		1 ϕ	4 ϕ	4 ϕ	4 ϕ	軽鉱物	重鉱物
1	22.03	0.10	1.08	9.17	1.93	0.31	0.04

表3 テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果

着した長石が含まれていた(表4)。

重鉱物では、角閃石(Ho)が非常に多く含まれ、斜方輝石や単斜輝石を伴う(表4)。

軽石型火山ガラス(p2)の屈折率測定では、範囲 1.4999-1.5019 (平均 1.5009)であった(図54)。

分析No	長石 (Pl)	不明 (Sp)	結晶型						ガラス合計	総鉱物合計	重鉱物					重鉱物の合計
			バゾル(組)型		輝石型	急冷結晶型		斜方輝石 (Opx)			単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Ho)	磁鉄鉱 (Mg)	不明 (Sp)		
			平形状 (b1)	Y字状 (b2)		輝石状 (pl)	スポンジ状 (p2)								フレーク状 (c1)	
1	203	35				12			12	250	35	6	183	22	4	250

表4 4号跡跡遺中の鉱物組成

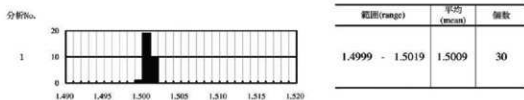


図54 火山ガラスの屈折率測定結果

4. 考察

溝SD1から検出された白色軽石混じり土を分析した結果、角閃石が特徴的に多く検出され、軽石型スポンジ状ガラス(p2)が検出された。火山ガラスの屈折率は、範囲 1.4999-1.5019(平均 1.5009)であった。以上の特徴から、白色軽石は榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)と同定される。

榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)は、6世紀中葉に榛名火山から噴出した降下軽石(pfa)、火砕流堆積物(pfl)からなり、分布は北東に300km以上の仙台まで及ぶ。主な鉱物は、角閃石(ho)、斜方輝石(Opx)からなる。火山ガラスの屈折率が範囲 1.500-1.504 (1.502-1.503)、斜方輝石の屈折率が範囲 1.708-1.712、角閃石の屈折率が範囲 1.672-1.712である(町田・新井, 2003)。

引用文献

町田 洋・新井朋夫(2003)新編火山灰アトラス, 336p, 東京大学出版会。

橋山卓雄・植原 徹・山下 透(1986)温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定. 第四紀研究, 25, 21-30.

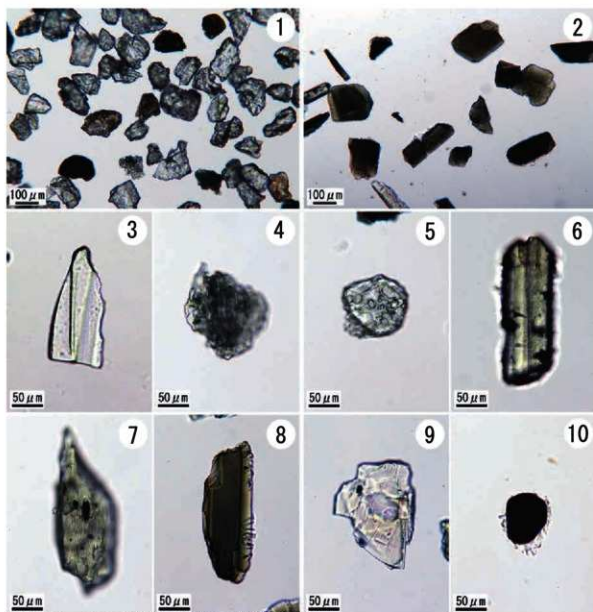


写真155 テフラ試料中の粒子の顕微鏡写真

- 1.4 φ軽鉱物 2.4 φ重鉱物 3.バブル型平板状ガラス 5.軽石型スポンジ状ガラス
 6.ガラス付着長石 9.斜方輝石 10.単斜輝石 11.角閃石 12.斜方輝石
 13.ガラス付着磁鉄鉱

報告書抄録

ふりがな	みなみそうましないいせきはくつちょうさほうこくしょ14						
書名	南相馬市内遺跡発掘調査報告書14						
副書名	平成31・令和元年度試掘・確認調査報告						
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第38集						
編著者名	荒 淑人・佐川 久・濱須 脩・小椋 紗貴江						
編集機関	福島県南相馬市教育委員会文化財課						
所在地	〒975-0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目70 T E L.0244-24-5284						
発行年月日	西暦2021 (令和3年) 3月31日						
所収遺跡	所在地	コード	北 緯 東 経	調査期間		面積 (㎡)	調査原因
		市町村		上段:着手	下段:完了		
		遺跡番号					
真野古墳群B地区 2次調査	南相馬市鹿島区 小池字長沼	212500039	37° 41' 55" 140° 56' 21"	20190918 20191017	1,208	保存目的	
浦尻貝塚 15~17次調査	南相馬市小高区 浦尻字宇ノ前	212200500	37° 31' 27" 141° 01' 13"	20190911 20200323	452	保存目的	
高見町C遺跡 4次調査	南相馬市原町区 高見町一丁目	212500415	37° 38' 20" 140° 55' 53"	20190406	20	個人住宅建設	
鶴谷坂下遺跡 1次調査	南相馬市原町区 鶴谷字坂下	212500714	37° 23' 48" 140° 57' 37"	20190418 20190424	60	土砂採取	
東始B遺跡 1次調査	南相馬市小高区 上根沢字東迫	212500742	37° 32' 44" 140° 58' 27"	20190607 20190628	99.15	土砂採取	
天梅B遺跡 1次調査	南相馬市小高区 金谷字天梅	212500741	37° 33' 24" 140° 55' 38"	20190617 20190808	347	土砂採取	
権現沢遺跡 1次調査	南相馬市鹿島区 寺内字権現沢	212500731	37° 41' 46" 140° 56' 55"	20190917 20200124	120	太陽光発電 設備設置	
池ノ沢遺跡 3次調査	南相馬市小高区 神山字池ノ沢	212500628	37° 31' 28" 140° 58' 06"	20190702 20190710	492	土砂採取	
中村平遺跡 4次調査	南相馬市小高区 吉名字中村平	212500533	37° 33' 27" 140° 58' 35"	20191007 20191009	20	個人住宅建設	
原B遺跡 1次調査	南相馬市原町区 馬場字原	212500418	37° 36' 17" 140° 20' 21"	20191113	40	工場兼事務所建設	
桜井B遺跡 15次調査	南相馬市原町区 上洪佐字原田	212500178	37° 38' 32" 140° 59' 15"	20200110	13.4	個人住宅建設	
熊平B遺跡 1次調査	南相馬市小高区 小谷字摩辰	212500598	37° 34' 17" 140° 20' 21"	20200109 20200110	60	太陽光発電 設備設置	

所収遺跡	所在地	コード		調査期間		面積 (㎡)	調査原因
		市町村	北 東	緯 経	上段:着手		
		遺跡番号			下段:完了		
荒神南遺跡 9次調査	南相馬市小高区片 草子荒神南	212500512	37° 34' 29"	140° 58' 21"	20200120 20200121	6.9	車庫建築
栗成沢遺跡 1次調査	南相馬市小高区 上根沢字栗成沢	212500573	37° 32' 40"	140° 57' 03"	20200127 20200312	669	農地造成
東広畑A遺跡 1次調査	南相馬市小高区 小高字東広畑	212500514	37° 34' 23"	140° 58' 46"	20200203 20200207	93	太陽光発電 設備設置
中村平遺跡 5次調査	南相馬市小高区 吉名字中村平	212500533	37° 33' 27"	140° 58' 35"	20200212	10	個人住宅建設
御市内遺跡 2次調査	南相馬市鹿島区 横手字御市内	212500017	37° 43' 20"	140° 56' 58"	20200220	20	個人住宅建設
中ノ内遺跡 1次調査	南相馬市小高区 小谷字内畑	212500603	37° 34' 13"	140° 57' 41"	20200225 20200226	40	太陽光発電 設備設置
池ノ沢B遺跡 2次調査	南相馬市小高区 神山字池ノ沢	212500743	37° 31' 38"	140° 57' 56"	20200312 20200318	40.4	土砂採取
大田和広畑遺跡 9次調査	南相馬市小高区 大田和字広畑	212500472	37° 31' 38"	140° 56' 57"	20200324 20200325	43.6	太陽光発電 設備設置
明神館跡 1次調査	南相馬市原町区 上大糞字館	212500301	37° 36' 35"	141° 00' 09"	20200323 20200330	27.5	法面整形

所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真野古墳群B地区 2次調査	古墳	古墳	周溝	—	国指定史跡
浦尻貝塚 15～17次調査	貝塚・散布地・集 落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	貝層・包含層	縄文土器・動物 遺存体	国指定史跡
高見町C遺跡 4次調査	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	—	—	
鷗谷坂下遺跡 1次調査	製鉄跡	奈良・平安	製鉄炉跡	鉄滓	
東船B遺跡 1次調査	製鉄跡	奈良・平安	塵滓場	鉄滓	
大梅B遺跡 1次調査	製鉄跡・散布地・ 集落跡	縄文・奈良・平安	竪穴住居跡・土 坑・小穴・木炭 窯跡	—	
権現沢遺跡 1次調査	散布地・集落跡	奈良・平安	—	—	

所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池ノ沢遺跡 3次調査	製鉄跡	奈良・平安	成洋場・製鉄炉跡・木炭窯跡	鉄滓・羽口	
中村平遺跡 4次調査	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	—	—	
原B遺跡 1次調査	散布地・集落跡	縄文・平安	—	—	
板井B遺跡 15次調査	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	—	—	
熊平B遺跡 1次調査	散布地	縄文	—	—	
荒神前遺跡 9次調査	散布地・集落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	竪穴住居跡	土師器	
栗成沢遺跡 1次調査	散布地	縄文	竪穴住居・土坑	縄文土器	
東広畑A遺跡 1次調査	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	竪穴住居跡・小穴	土師器・須恵器	
中村平遺跡 5次調査	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	—	—	
御所内遺跡 2次調査	散布地	縄文	—	—	
中ノ内遺跡 1次調査	散布地	古墳・奈良・平安	柱穴・小穴	土師器	
池ノ沢B遺跡 2次調査	製鉄跡	奈良・平安	製鉄関連遺構	鉄滓	
大田和広畑遺跡 9次調査	散布地・集落跡	縄文・奈良・平安	—	—	
明神館跡 1次調査	城館跡	中世	木炭焼成土坑・小穴	—	

印刷 2021年 3月 31日
発行 2021年 3月 31日

南相馬市埋蔵文化財調査報告書第 38 集

南相馬市内遺跡発掘調査報告書 14

—平成 31 年・令和元年度試掘・確認調査—

編集 南相馬市教育委員会 文化財課
発行 南相馬市教育委員会
〒975 - 0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目 70 番地
印刷 有限会社 愛原印刷所
〒975 - 0003 福島県南相馬市原町区栄町一丁目 8 番地
